



平成25-27年度 文部科学省留學生交流拠点整備事業

多文化共生のまちづくり 未来への第一歩

徳島大学国際センター

平成25-27年度 文部科学省留學生交流拠点整備事業

# 多文化共生のまちづくり 未来への第一歩

徳島から発信する受け入れる心の育成

平成28年1月 徳島大学国際センター 徳島市南常三島町1丁目1番地

平成25-27年度  
文部科学省留学生交流拠点整備事業

# 多文化共生の まちづくり 未来への第一歩

徳島から  
発信する  
受け入れる  
心の育成

平成28年1月 徳島大学国際センター 徳島市南常三島町1丁目1番地

はじめに	2
<b>Plan 1 Case Studies 14の物語ー未来に向けてー</b>	<b>5</b>
01 NPO法人 徳島共生塾一歩会	6
02 徳島市立高等学校	10
03 徳島県立中央テクノスクール	14
04 小松島市教育委員会生涯学習課 中央会館	18
05 渭北公民館	22
06 藍住町国際交流協会	26
07 徳島県女性海外派遣交流会（ペローラ）	30
08 徳島ユネスコ協会	34
09 徳島県立近代美術館	38
10 徳島県立博物館	42
11 徳島商工会議所	46
12 市岡製菓株式会社／株式会社ハレルヤ	50
13 (株) 柚子っ子	54
14 徳島県自治研修センター	58
<b>Plan 2 徳島県西部 美馬市 まほろば国際プロジェクト</b>	<b>62</b>
<b>Plan 3 徳島県南部 美波町日和佐地区 日和佐の魅力発見！プロジェクト</b>	<b>68</b>
<b>VOICE 留学生の声</b>	<b>74</b>
まとめにかえて	78
留学生交流拠点整備事業 とくしま異文化キャラバン隊活動一覧	82
とくしま「異文化キャラバン隊地域創生」コンソーシアム	84

## はじめに

### 〈徳島大学留学生交流会館設立を巡って〉

現在(2015年12月の時点)、徳島県内には高等教育機関にて学ぶ約300人の留学生がいます。故郷を離れて徳島(留学生らにとっては外国)で暮らし、日本語を学び、それぞれの専門を研究している人たちです。外国人留学生らの住居探しは、今でこそ比較的容易となりましたが以前は貸主が少なくいろいろな問題がありました。

今から約20年前(1994年)の3月3日に朝日新聞の夕刊に次のような記事が掲載されました。見出しは「留学生寮に住民反発、建設計画難航『外国人信用できぬ』徳島大」。内容は、「大学が農場跡地に国際交流会館(外国人留学生の宿舎)建設計画の説明会を住民に対して行ったところ、1回目の1月には住民から「交流していきたい」という声と「留学生は怖い、不安である」の意見が出され、さらに2メートル以上のフェンスや照明の設置等を要求された。2回目の2月には、大学側が歩み寄り案を提示したが、さらなる要求(4階建を2階にする等)が出され交渉は物別れに終わる。その際の住民代表は『日本人なら信用できるが、外国人は信用できない。(中略)孫子の代まで外国人と暮らさなければならないのだから、これくらいの要求は当然だ』、と発言し、当時の学長は『留学生が怖いなど言っておられるようだが、自分の子や孫がいつこの国で世話になるかもわからないのに、文句を言っているのは、日本の国際的な地位は高まらない。誠意を持って話し合えば住民もわかってくれるだろう。』、という留学生を巡る二つの立場の対立が報じられました。

さらに3月5日には、天声人語がこの事件をとりあげ、徳島がポルトガル人のモラエスが住んだ土地であることや、藍産業で多くの人を外からやってきたこと、しかし今は人口移動が少なく交流がないのかもしれないとし、最後に「日本人の懐はもっと広く深いと思っていたが。。。」と締めくくっていました。このように全国紙によってこの件が広がったために、住民と大学に対して様々な意見が周りから出され、事態は一気に進展しました。翌日6日の朝刊には、「地元住民受け入れへ、徳島大学の留学生宿舎建設」と当初説明なく工事が始まったことから一部の住民が反発した事実と、今後は交流を深めたいという考えに変わり、両者が和解し宿舎建設が進められることになったという記事が掲載されました。

この事件は、当時の異文化理解を促進し教育する立場にある人からはケーススタディ(事例)として取り上げられることになったのです。いろいろな側面から考えることができますが、住民の中に、自分の生活する地域に外国人が住むことに

なるという現実から、素直な気持ちが吐露され、そして自分と子孫のために反対するという行為に出たこと、おそらく宿舎建設がなければ心の中にこのような気持ちがあるのは明らかにはならなかったと思います。

異文化理解の解釈では、日本人ならOKで外国人はOKではないとする行為は「差別」と言えます。その「差別」が現れたのは、その人の根底にある価値観「外国人は怖い、信じられない」があったからです。またこの価値観が外に出されない場合は「偏見」にあたり、もしかすると永遠に心の中に留まるだけで外に現れなかったかもしれません。

人は、ものごとを理解するために自分の周りのものをカテゴリーやグループに分けて認識していくとされています。これがいわゆる「ステレオタイプ」にあたります。そしてさらに、あるグループに負(マイナス)のイメージを結びつけた場合にそれは「偏見」になります。先ほどの例で言えば、日本人ではない人たちを外国人のグループとした場合、(実体験がなくとも)そのグループに「怖い」を結びつけられ、「偏見」となりそのグループに対する言動が「差別」的なものになっていきます。また「おもしろそう、自分の知らない世界を知っている」という正(プラス)のイメージを結びつけたならば、外国人とぜひ付き合いたいという行動になることがわかります。

もちろん心の中のことはこのように単純なものではありません。私たちは生まれた環境や教育によって様々な価値観を身につけていきます。ここで言いたいのは、「偏見をなくしましょう!」ではなくて、私たち一人ひとりが「何らかの偏見を持っていることに気づき」、それは「どのように生まれたのか」、そしてこれからの自分と社会にとって「変えた方がよいのかどうか」を常に自分に問うていくことが大切であるということです。

徳島大学が経験した事実は20年前のことですが、外国人に対する「偏見」はもちろん今でもなくなってはいません。私たちをとりまく世界で、様々な情報から新たな「偏見」が産み出されているのが現実です。

2006(平成18)年3月には総務省が「地域における多文化共生の推進」に関する報告書を作成しました。そこには、今日本社会で日本人と外国人住民が協力して地域社会を作っていく必要性が述べられています。さらに様々な外国人住民に対する取り組みとともに、受け入れる側の日本人に対する意識啓発の必要性にも言及しています。前述の「偏見」に対する考えもこの意識啓発、言い換えれば広い意味での多文化理解を実践する必要があるといえるでしょう。

参考資料:

総務省「多文化共生の推進」

<http://www.soumu.go.jp/kokusai/>

### 〈多文化理解から多文化共生力の養成へ〉

#### ●多文化共生とは

私たちがめざす多文化共生の社会を、「様々な文化(価値観)を出し合い、それらを話し合い(対話)によって検討しながら、一緒に安全で安心できる新しい生活の場をつくっていく社会」としたいと考えます。これをめざすことによって得られることは、今どの地域でも課題としている、少子高齢化による人口減少と社会の機能の減退、その状況下での町おこし(地域の活性化)や産業や観光の活性化への取り組みにもつながるということです。言い換えれば、内閣府が掲げる「共助社会」=「個人の多様な価値観や意思が尊重されながら、新たな『つながり』が構築され、全員で作りに上げていく社会」と重なる部分が多いように思います。この目標の中の「個人」と「全員」に地域の生活者としての外国人の存在を入れていくことが、よりグローバルな共助社会=多文化共生社会と考えることができます。

#### ●文化をめぐることば



また文化に関することばに関して説明を加えておきます。様々な文化の定義の中からここでは、山田泉(参考文献2013:p64)の「文化とは、何らかの社会集団に存在しているもので、そこに帰属する人の価値観と行動様式及び社会集団自体の社会規範と社会構造に現れた規定である」をもとにします。いわゆる、芸術や料理等を文化とするだけでなくもっと広く「文化」を捉えています。また山田は文化を表層と深層(見えるものと見えないもの)に分けて、個人に見えるものを行動様式に、見えないものを価値観としています。また社会にも表層と深層があるとし、それぞれを社会構造と社会規範と考えます。たとえば前述の「外国人に対する気持ち」=価値観に、行動様式=差別や受け入れる行動となると考えられます。

私たちはふだん自分の「文化」を意識することは少なく、「異文化」に触れることすなわち「異文化接触」によって、自らの考え、行動、感情を調整しないとうまくやっていけない事態に直面します。「自文化」との対比で「他文化」ということばも使われます。さらにヨーロッパのEU(欧州連合)では、「多言語・多文化」の社会から「複言語・複文化」の社会という理念を掲げて「多様性における統一」を図ろうとしています。簡単に言うと、多言語・多文化は一つの地域に様々な言

語と文化を持つ人がいるという考え方であり、複言語・複文化は、一人の人が複数の言語を操り、複数の文化(価値観)を持ちながら共存するというイメージのものです。そして、EU内で生活する人たちが社会的行為者として理念ではない多様な価値観を摺合せ、多様な言語を操り、コミュニケーションをしていくその中でEUの一員となるという考え方で。

たとえば、今私の教えている日本語の初級クラスでは7カ国8名の留学生がいます。このメンバーでパーティをすることで、共通言語の日本語の「乾杯!」で始まるのではなく、それぞれの国の言葉(ラオス・モンゴル・インドネシア・タガログ・フランス・スペイン・ポルトガル語)で「乾杯!」と言い合い、そしてその中にはお酒を飲まない文化の人もいますが、グラスをみんなで持ち上げて一緒にパーティを楽しもうとする、互いの言葉を認めそして互いの文化を理解して共存していこうとする、これが複文化・複言語のイメージと考えています。現在の徳島の状況を考えると、まず多文化共生社会を、次に複言語・複文化社会へとつながることが期待されます。

#### ●多文化共生力の養成

そして今、異文化と積極的に関わり、違いから学び、自らが変わる(変容する)そして少しずつ周りや社会を変えていく力を多文化共生力とし、このような能力を幼児から大人までの生涯にわたって養成していくことが今また必要なのです。

参考資料:

内閣府 「共助社会づくりの推進について」

[https://www.npo-homepage.go.jp/uploads/report33\\_8\\_gaiyou.pdf](https://www.npo-homepage.go.jp/uploads/report33_8_gaiyou.pdf)

参考文献:

山田泉『多文化教育I』2013法政大学出版局

D・コスト他(姫田訳)「複言語複文化能力とは何か」2011

『大東文化大学紀要人文科学編』第49号, pp.249-268.

### 〈本書の目的〉

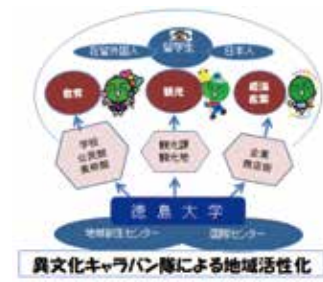
本書は、文部科学省委託による徳島大学留学生交流拠点整備事業の3年の成果をまとめたものです。国際センターは平成25年度より3年間「異文化キャラバン隊による国際化と新たな地域の創成-留学生との交流による多文化共生まちづくり-」のテーマを掲げ、留学生を中心とする様々な活動を行ってきました。

活動を続けて最終年度を迎えるにあたって、単なる活動の報告(活動記録はホームページに記載)ではなく、国際センターとともに活動をつくってきた同志ともいえる組織や団体の側

から、それぞれの物語を綴ってもらいました。それによって、在住外国人が少ない、少子高齢化によって労働人口が減少している、地域の国際化と同時に活性化(地域おこし)をめざしているといった、同じ課題に取り組む他県や他地域の人たちにも何かヒントになるかもしれないと思ったからです。そして大学といった教育機関が中心となって、地域の特にグローバルとローカルを組み合わせたグローカル化を目標に据えた行動のモデルとして提示できるのではないかと考えました。

さらに執筆者のみなさんには、一緒に取り組んだ活動を(課題-取組-成果-未来に向けての流れに従って)書くことによって振り返っていただきました。この内容を共有することによって、大学との連携だけでなくそれぞれの組織や団体が「多文化共生のまちづくり」を大目標とした実動するコンソーシアムであることを確認するために作成しました。ここから事業終了後も互いに協力しながら活動を継続させ、新たなメンバーを加えさらに新たな活動を生み出していこうと考えます。

〈異文化キャラバン隊による国際化と新たな地域の創成-留学生との交流による多文化共生まちづくり〉



本事業は、徳島大学が中心となって地域コンソーシアムを組織し、留学生と日本人学生からなる「異文化キャラバン隊」を各地域へ派遣することにより、地域の人々との異文化交流を通じて「外国人が身近にすることが当たり前な国際社会」「文化や習慣の違いを認め合いながら暮らしている姿」を目標に展開しました。

実際には徳島県を舞台に次の4PLANを実施しました。

PLAN1: \_\_\_\_\_

徳島市内を中心とした組織や団体との交流を中心とした多様な活動

PLAN2: \_\_\_\_\_

徳島県西部美馬市「協町劇場オデオン座」でのパフォーマンス活動⇒名称「まほろば国際プロジェクト」

PLAN3: \_\_\_\_\_

徳島県南部美波町の日和佐八幡神社秋祭りを支援する活動⇒名称「日和佐の魅力発見!プロジェクト」

PLAN4: \_\_\_\_\_

PLAN1から3の活動のまとめとして成果をどのように活用し継続していくかの活動⇒本書はPLAN4に位置づけられます  
本事業のURL: <http://www.isc.tokushima-u.ac.jp/caravan/index.html>

〈本書の楽しみ方?〉



PLAN1には多文化共生のまちづくりに向けての14のストーリーが、PLAN2と3は実施者の想いを込めたプロジェクトの概要が語られています。どれも活動の記録写真とともに読んでいただければと思います。

また編者の三隅は、本事業を実施する前の2007年に「とくしま国際フレンドシップ憲章(徳島県が平成20年3月に制定)」の作成に関わりました。この憲章は3つの合言葉と具体的な13の行動目標を掲げています。そして地域社会の一員として外国人住民と一緒に「多文化共生のまちづくり」と「国際化社会に対応した環境づくり」をめざしています。この3つの合言葉「知りあおう」「ふれあおう」「認めあおう」を選定する際に、委員の間から出た意見は、もっと踏み込んだ外国人住民との「～あおう」が必要ではないかというものでした。「助けあおう」や「協力しあおう」等が出されましたが、最終的には3つの合言葉から始めてこの憲章自体が浸透したところに、4つ目を見つけていくことにおさまりました。本書からその4つ目の「～あおう」が見つかるのではないかと考えます。

参考資料:

とくしま国際フレンドシップ憲章  
<http://www.pref.tokushima.jp/docs/2008040200037/>



Plan 1 Case Studies

14の物語  
— 未来に向けて —



# O

## 異文化を理解し、国際交流を深めるための “外国人お遍路体験講座”

NPO法人徳島共生塾一步会



### 課題

テーマや概要

四国八十八カ所霊場と遍路道（四国遍路）は、四国が誇る地域の文化遺産であり、ユネスコの世界文化遺産登録を目指す四県の官民産学が一体となった取り組みが続けられている。世界遺産となることは四国の宝を世界の宝として認めてもらうことであり、国内だけでなく万国共通の文化として、海外にもその価値を伝えて評価して頂かねばならない。現在、多くの外国人がお遍路にやってくるが、いずれの国からのお遍路にも優しく迎えることは、世界遺産登録を目指すためには極めて大事なことである。

ところが、2014年に某国のお遍路

に対して、案内標識を巡って中傷する事件が発生した。四国知事はこれは許されない憂慮すべきことだと、改めて「四国遍路は万国を迎え入れる共通の文化である」との緊急合同宣言を発表した。異文化への不理解がこのような不祥事に繋がると、そして異文化理解の推進が更に必要と考える。国際間の人権差別は決してあってはならない。このような背景を踏まえ、多くの外国人と異文化を理解し、交流を深めるために遍路体験講座を開催し、さらに身近な外国人グループとして異文化キャラバン隊に遍路体験講座への参加をお勧めした次第である。

私たち徳島共生塾一步会は、会員60名の環境団体であり、この10年間で、八十八カ所遍路道の美化活動を続けてきたが、近年は四国遍路が世界遺産を目指すための啓発活動にも積極的に取り組んでいる。“四国の環境と文化を守り、後世に伝えよう”が、徳島共生塾一步会の基本方針である。

当会にとって、異文化キャラバン隊との出会い、当会活動への参加交流は願ってもないことで、国際交流に一役立てると考えて、この事業に賛同し取り組んだ次第である。





## 取組

発見や気づき

①**実施の趣旨**：地域文化である四国遍路について、身近な外国人である異文化キャラバン隊を中心にした県内外国人に体験して頂き、理解を深める。四国遍路が世界遺産を目指すには、諸外国への情報発信が欠かせないがこの事業により、まず身近な外国人への情報発信ができる。この事業には2014年から3か年計画で取り組んでいる。

②**主催と共催**：当講座の主催は徳島共生塾一歩会であるが、いくつかの団体の共催、後援により実施している。共催は徳島大学、後援は徳島県、徳島ユネスコ協会、徳島国際交流協会である。

③**参加者数**：1回あたりの参加者は、異文化キャラバン隊等外国人15名～20名、日本人スタッフは遍路ガイド、歴史文化ガイド、通訳等10名～15名により、総勢30名近い団体となる。

④**講座内容**：八十八カ所霊場を訪ねて遍路ガイド（公認先達）から参拝のマナーを学び、住職からは寺の歴史、文化財等の説明を聞く。霊場（寺院）と霊場（寺院）を結ぶ遍路道のウォーキングでは、古代から続けられてきたお遍路という歩行による修業行為について実際に体験する。道中、お互いに交流し、自国の文化を語り、互いの文化を伝え合い、親しい関係づくりを図る。

⑤**正装での講座参加**：遍路文化の理解のためには、形を整えることも必要であり、遍路用品を事務局で準備し、正装しての参加とした。全員が白衣を着用、菅笠を被り、金剛杖を持つての参加である。

⑥**実施場所と参加者**：（参加者にはスタッフは含まず）

2014年

9月 第1回 第13番霊場～17番霊場（平地コース）参加者8カ国17名  
11月 第2回 第1番霊場～5番霊場（平地コース）参加者7カ国16名

2015年

10月第3回第20番霊場鶴林寺上り下り（山道コース）参加7カ国13名  
11月第4回第10番～11番（吉野川横断コース）参加者11カ国20名

2016年

山道コースと平地コースの予定

⑦**事故アクシデントなし**  
お遍路体験は車の往來の多い街中や山道の上下りを団体で歩く等、決して安全なイベントではないが、幸い現在までに事故怪我等のアクシデントもなく、事業がスムーズに実施できている。



## 2014

10月19日

外国人対象の「遍路体験ウォーキング」開催  
13番霊場大日寺～17番霊場井戸寺  
異文化キャラバン隊参加



11月29日

外国人おへんろさんを迎える「おもてなし実践講座」徳島市で開催



12月6日

外国人対象の「遍路体験ウォーキング」開催  
1番霊場霊山寺～5番霊場地蔵寺  
異文化キャラバン隊参加



## 成果

様々な視点から

過去4回の体験講座の実施で16か国延べ70名近い参加があったが、これら多くの国の外国人に地域文化の代表ともいえる八十八カ所霊場と遍路道を体験して知っていただくことができたことは何よりの成果と考える。霊場参拝やウォーキングを共にして、お互いの交流を深める場ができて、国際親善に一役立てたことは嬉しく誇りにも思う。異文化への理解はお互いの存在を認めあう基本であり、多文化共生社会の理解に繋がるものと考えている。

それに四国遍路の素晴らしさを多くの外国人に発信できて、世界遺産を目指した活動にも繋がるものと確信している。



## 未来に向けて

異文化キャラバン隊の外国人留学生のみなさんは、帰国してからはこの異文化体験のことを口コミ等で周囲に伝え、四国遍路のことがより広く海外に広まることと期待したい。世界遺産登録を目指すためには、海外への情報発信は欠かすことができない。外国人お遍路の増加に備えて、私たち一歩会は世界万国の方にお遍路が不便なく実施

して頂けるよう、多言語標識の設置や洋式トイレの増加等を関係者に要望してゆく。

異文化キャラバン隊の行動しながら学ぶ姿勢には、本当に感心し敬意を表する。私たち地域団体は今後も積極的に交流の場づくりをしなければならない。今回実施のお遍路体験講座は、3か年計画が終了した後も資金の確保

にも努めて、毎年継続実施するよう検討している。

異文化キャラバン隊の関係スタッフの皆様には心から感謝申し上げたい。そして今後も協力しながら連携を続けていきたい。

## 2015

9月3日

外国人おへんろさんを迎える「おもてなし実践講座」阿南市新野町で開催



9月9日

外国人おへんろさんを迎える「おもてなし実践講座」阿南市加茂谷地区で開催



10月24日

外国人対象の「遍路体験ウォーキング」開催  
勝浦町 鶴林寺の上り下りコース  
異文化キャラバン隊参加





# 02

## 地域の国際化を目指す 高大連携の可能性

徳島市立高等学校



### 課題

テーマや概要

徳島市立高校は徳島県において最も早期から海外修学旅行を実施しており、入学後一年間をかけてその準備を行ってきた。10年間続いた韓国訪問の後、シンガポール・マレーシア、オーストラリアと行先は移っていったが、その都度、徳島大学の教員や留学生を招聘し準備講座を開催してきた。また、2003年には徳島県人権啓発ビデオ（「『外』から見たわたしたち」東映教育ビデオ）制作において、中国籍の市立高校生家族と徳島大学ドイツ語教員家族とが共演した経緯があった。しかし、修学旅行の行先を海外から国内に変更した2009年度からは、

「国際理解」「異文化理解」の教育プログラムとしては、徳島市が姉妹都市提携しているアメリカ・サギノー市への留学生派遣以外は、主に英語教育と人権教育が中心となってきた。

このため「『総合的な学習の時間』等を通じて、多文化理解に関する学習の充実を図る」との学校の教育目標を具体化するために2009年度から徳島大学国際センターとの交流プログラムを実施している。このことにより、①年齢の近い外国人大学生・院生から直接に異文化を体験する ②留学を選んだ経緯や専攻分野などから今後の進路選択、さらには生き方について多面的

に考える機会をもつ ③他国の教育体験を聞くなかで自国の教育制度を相対化し、教育のもつ課題を考えることを目指した。

また、この交流を継続する中で、学校を離れ、場を徳島の地域に移し、さらに多くの人々と交流を広げる必要性を感じるようになった。互いの学校がある徳島市と、県南部の漁村の美波町日和佐地区において、実際に地域を歩き、町の人々とふれ合う企画を用意した。（PLAN3「日和佐の魅力発見プロジェクト」P.68-参照のこと）





## 取組

発見や気づき

### 【留学生交流会】

2012年1月に高校では、1年生各クラスに留学生を招聘し交流会をもち、また高校の授業に参加してもらう企画を開始した。

交流会を企画する担任は、昨年度の交流会を参考にし、「日本の駄菓子」「お手前」「日本の遊び」などを取り入れることを決めた。あるクラスの事例を示すと、担任が生徒にどのような交流会をするかをたずね、生徒の発案により日本独自の食べ物で、歴史的謂れがあるものを一緒に食べながら、母国の教育制度、

留学をどのようにして決めたか、また大学での生活などについて話し合うことを決めた。特に留学生の案内を担当する「お世話係」は、自薦で二人が決定した。また同担任の数学の授業では、図形で重心の授業の中に日本の遊びの「けん玉」を取入れて説明を加えるという工夫をした。

交流活動は14名の留学生が8つのクラスに分かれて参加した。クラスごとの交流と昼食そして授業という流れのため、市立高校に集合してからはクラスごとにそれぞれの体験をした。

### 【徳島の魅力発見】

2015年8月10日に実施した、徳島大学サマースクール参加の留学生40人に対し、学部生・徳島市立高校生25人が市内を案内し、フォトブックを作成するプログラムを実施した。

高校生たちには、予め徳島市の都市形成について、大学において松永学芸員（徳島県立博物館）より講義を受け、案内のポイントとなる場所などを紹介してもらった。



## 成果

様々な視点から

交流会では、留学生が高校に訪問することによって、高校生・留学生・教員相互の「対話」をもとに教育制度の違いやそれを含む生活文化の違いと認識することだけでなく、理解しあうことの難しさやおもしろさが共有できる端緒になったと考える。

サマースクールでは、日ごろ生活している町ではあるが、留学生を案内するとなると、あらためて勉強が必要となり、そのことが新たな地域の魅力の発見につながった。

高大連携教育というと、大学教員の出張授業等で大学側の教育内容を高校に伝えることが中心であった。しかし、

同年齢の半数以上が大学に進学する状況では、高大7年間を通じた教育を共に考える時期にきていると実感する。

2009年度から実施した「留学生交流会」は今年（2015年）で7年目を迎える。1年に約300人の高校生がこの交流活動を体験し、2000人を超える参加者がいたことになる。また、8月の「徳島の魅力発見（町歩き）」は、1月に交流会を体験した生徒が手を挙げて参加した。

それぞれの体験による「気づき」が自らのこれからの活かしていくことや、それぞれの「気づき」を他者へ伝えていくこと（波及効果）もねらいの一つである。



## 未来に向けて

交流活動自体を単なる授業外イベントとするのではなく教育のデザイン（インスタラクショナル・デザイン）に位置づけ新たな教育活動とすることである。実現のためにはこれまでの経験を通して以下の5つが必要であろう。

- ①明確な教育目的を定める
  - ②生徒や留学生のニーズを図る
  - ③交流活動の事前・事後学習を設定
  - ④高校と大学側の綿密な話し合い
  - ⑤関係者を巻き込んだ活動設定
- そして何よりも「おもしろそうだ、やり

がいがありそうだ、やればできそうだ、やってよかった」という気持ちを生徒にもたせる活動づくりを心がけたい。これからもこれらの活動を通して、生徒さらに教員も共に学ぶ場として活動を続けていきたいと考える。

<本稿は、生駒佳也他「地域の国際化を目指す高大連携の可能性 - 交流活動のもたらすもの -」2011年徳島大学国際センター紀要 pp.25-31をもとに作成した。>



1991

11月

海外修学旅行を実施。徳島大学の留学生などを招聘し、準備講座を開始。

2001

7月

韓国国立木浦大学国際理解セミナー参加（～2004年7月）

2003

徳島県人権啓発ビデオ「『外』から見たわたしたち」制作において、中国籍の市立高校生家族が出演。

2007～

ALT（外国語指導助手）専任化、イングリッシュキャンプ実施

2008～

11月

徳島市の姉妹都市、アメリカ・サギノー市への留学生派遣開始（1963～70年までは交換留学・交換教員の派遣実施

2009～

7月

徳島大学国際センターと出張講義（2年生対象約40名）と訪問・交流活動（1年生対象約320名）のプログラムを開始。

2013～

とくしま異文化キャラバン隊との活動実施。「留学生交流会」、「日和佐秋祭り」への参加。

2015～

とくしま異文化キャラバン隊との活動実施。「留学生交流会」、「日和佐秋祭り」、「サマースクール」への参加。





# 03

## 03

### 留学生の職業体験 テクノスクール生との多文化交流事業

徳島県立中央テクノスクール



#### 課題

テーマや概要

徳島県立中央テクノスクールは、徳島県が設置、運営する公共職業訓練施設である。県内に3箇所あるテクノスクールの中心的役割を持ち、隣接する徳島県経済産業会館(KIZUNAプラザ)と連携しながら、産業人材の育成にあたっている。

児童生徒の職業観の醸成から青少年の進路選択、職業訓練、職業人となってからのスキルアップや世代間の技能継承まで、社会人としての全てのステージにおいて、技術、技能を通し

でのフォローアップが出来るよう、施設内訓練、委託訓練、在職者訓練の他、本格的な施設、設備を活かした対外的な各種イベントを幅広く展開している。

小中高校生の職業体験授業、工業高校生の実践的技術実習、一般人向け県立総合大学校講座、工業高等専門学校との共同研究等を行ってきているが、大学生に対しての体験イベントは行ったことがなかった。現場に根ざした技術を主に扱うテクノスクールと

基礎、理論、応用を扱う大学では目指すところが違うという思い込みからであった。

しかし、留学生の日本理解の取組を知る中で、日本を理解してもらうには、日本の特徴のひとつであるきめ細かなものづくりの技術は外せないの思いから、キャラバン隊に依頼し、留学生に職業体験をしてもらうことになった。テクノスクール生にとっても、自分たちが学んでいる技術を通じて留学生と交流できる機会として期待した。





## 取組

発見や気づき

午前中の2時間という制約の中で、出来るだけの体験、交流をしてもらうということで、木工技術科と美容科での職業体験と理容科の見学を行った。

木工技術科では、ペン立てを組み立てる実習を行った。木工技術科のテクノスクール生が接着剤をつける要領、組み立てるコツを指導した。日本語は通じたがコツが伝わらない。短時間で何とかして組み立ててもらいたいとみんな頑張った。考え方が同じでないことがよく分かった。

美容科では、テクノスクール生が留

学生にハンドマッサージとネイルケアの施術をしながらの交流を行った。留学生のみなさんも、緊張が解けてきたのか、雰囲気が一段と和やかになり、楽しく話が出来ていた。最後に全員で記念写真を撮る頃には完全に打ち解けて笑顔で写真に収まった。活動の後、アンケートを採ったところ、楽しかったのでもた来て欲しいとの意見が多かった。初めてのことで自然に会話や交流が出来るか心配があったが、全く心配することはなかった。

昨年度、ドイツからの教育使節団が

中央テクノスクールを訪問していただき、技術の教育訓練に共通するところが多いことに双方が改めて気付かされたことがあった。継続的な交流、連携に向けた動きが始まっており、技術という具体的なものを通じて出来る意思疎通、相互理解の可能性を期待していたところであった。今回、キャラバン隊のみなさんに体験、交流をしてもらったことで、それが実証された形になった。

2014

6月13日

ドイツニーダーザクセン州教育関係者訪問団見学  
中央テクノスクール施設、訓練状況見学、質疑

2015

7月9日

キャラバン隊来校  
留学生の職業体験(木工技術科、美容科)



## 成果

様々な視点から

理容科、美容科では、社会福祉の実習の一環としての老人介護施設での実習があり、ハンドマッサージやネイルケアの施術をしながらの交流を行っている。曾孫ほどの年齢差があるが、自分の持ち味を活かし、工夫して話をしている。普通、異文化という遠い外国の文化を思い浮かべるが、文化をその人の価値観や行動規範と考えれば、同じ国の中でも年齢の違いや地域によって結構な違いがあり、また逆に違うと思っていたのに意外に通じるところがある。こうしたことを留学生との交流で気付かされることになった。



## 未来に向けて

理解し合う一番の早道は、共に苦勞することだと思っている。理容科の実習場には、実物の理容店を模したトータルワークルームという施設があり、そこでの実習において、お客様と理容師になり、留学生は言葉が通じにくくても何とか希望を伝えようとし、テクノスクール生はプロとしてお客様の意向をくみ取って満足していただこうと

する、そうしたやりとりの中で多文化共生の素地が形作られると考えている。将来、理容師として世界一周の船に乗る可能性のある者もあり、テクノスクールで学んだ者が世界をフィールドとして活躍する時代になっている。期待される修了生像のひとつとして考えていきたい。





# 04

## 夏休みキッズ教室 徳島大学留学生とあそぼう

小松島市教育委員会生涯学習課 中央会館



### 課題

テーマや概要

小松島市は1960年代頃まで港の旅客船業や紡績・パルプ・臨海工業団地等を中心に繁栄したが、1999年には旅客船業が、2000年代には工場の撤退・閉鎖等があり、45,000人程だった人口は現在約39,000人に減少している。

当館は小松島市教育委員会生涯教育課の管轄下であり、非常勤職員4名で構成され、当館主催事業や貸し館業務を行っている。建物は鉄筋3階建て、全市民を対象にした生涯教育の場であり文化・教養・趣味を求め、年間約27,000人の市民が利用している。

当館主催市民講座の英会話・中国語

は外国人講師が担当をし、また、小松島市国際交流協会も外国人講師を招き英会話教室等の活動に当館を利用している。

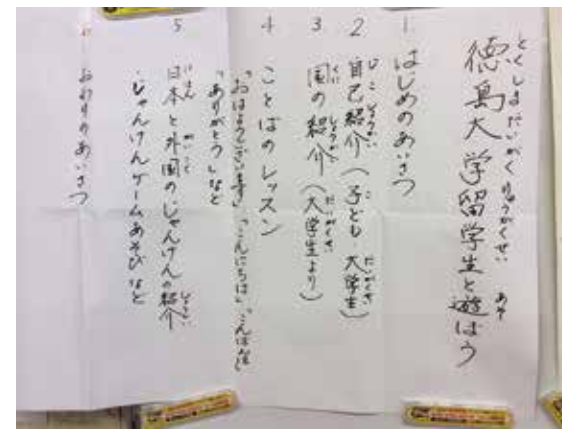
利用者（市民）も外国人と一緒に活動したり、生活を共にしたりすることで身近に異文化を感じているが、一方色々な外国の方々の中には研修・労働・結婚等で、小松島市に暮らしながら、言語や異文化等での違いに戸惑いを感じている方も見受けられる。

当館周辺は保・幼・小・中・高校があり、外国人の子どもたちも共に保育や教育を受けている。多文化共生とは地域づくりであり、保育や教育現場だ

けに任せるものでなく、生涯教育として取り組む必要がある。

さて、昨年春、生涯学習課掲示板で『異文化キャラバン隊』のポスターが貼ってあるのを知り、早速徳島大学国際センターと小松島市国際交流協会に連絡を取り当館での留学生の受け入れを申し入れた。

当館は小松島市国際交流協会と活動を共に進めていく中で、保・幼・小・中・高校・家庭・地域社会・各機関等と連携しながら、異文化に取り組む地域づくりを進めていく必要があると考えている。





## 取組

発見や気づき

2014（平成26）年8月8日

### 徳島大学留学生と遊ぼう

長期休業中を利用し、キッズ英語教室や異文化子キャラバン隊によるキッズ教室開催するに当たり、小松島市国際交流協会に協力を求め、キャラバン隊以外の外国人にも参加をお願いする。

また、徳島新聞朝刊火曜日欄「こまつしま広報」、タウン誌「花水木」等の掲載や周辺の教育現場にもお願いし市民参加を呼びかける。

市内の子ども（3歳～小学6年生）とその保護者、在留外国人（コロンビア・中国・カナダ人）も参加する。

子どもたちや大学生の紹介、各国の紹介、簡単な言葉のレッスン、市民生活課職員による腹話術、当館職員の手品等を行ったり、コロンビアのサルサのダンスを教えていただいたりして交流

をする。

キャラバン隊 5名

子ども 60名参加

### 2015（平成27）年7月30日キッズ英語で遊ぼう

自己紹介、国の紹介、言葉のレッスン、ジャンケン遊びをする。

パワーポイントで国の紹介をして頂いたり、挨拶の言葉の違いを学んだり、食べ物の違いを知ったりして、国によって色々な違いがあることを知る。

じゃんけんゲームでダンスをしたり、子どもたちが留学生に抱かれたりして肌と肌とのふれ合いを楽しむ姿がある

留学生 12名

ボランティア大学生 7名

子ども 44名参加



2009

7月

小松島市国際交流協会と一緒に小松島市新開幼稚園にて保護者と共に、外国人の子育て支援活動開始  
(絵本の読み聞かせ・日本語教室等)

2012

4月

小松島市国際交流協会と一緒に小松島市幼稚園にて保護者と共に、外国人の子育て支援活動開始  
(絵本の読み聞かせ・日本語教室等)

2014

8月8日

徳島大学留学生と遊ぼう



## 成果

様々な視点から

保育・教育現場にも保護者の就労等により、外国人の子どもたちが増えつつある。外国人保護者が全く日本語を喋ることが出来なくても、身振り手振りや片言の英語でお互いの心が通じている。当館で「留学生に抱っこされたことを子どもたちはとても喜んだ」と話してくれる幼稚園長先生。異文化交流とは言葉が通じなくても「ハートに

よる交流ですね」と話してくださったりしている。

まだまだ田舎街では外国人が珍しく、お互いが共存する努力をしながら、異文化を受け入れている。当館が地域づくりをしているその裏では、小松島国際交流協会が日本語教室のボランティアをしてくださり、異文化交流の手助けをしてくださっている。



## 未来に向けて

2015年秋から市民対象に当館主催市民講座初級・中級英会話の講師に、ハワイ在住であった日系二世の東條アイリーン先生をお招きして、若・中・高齢者32名が学んでいる。この出会いも当館が小松島市国際交流協会と共に活動をしていることで実現していることである。東條アイリーン先生が日本語と英語をともに話すことが出来るおかげで、初級英会話の参加者にも人気がある。このような地域に住む外国人の協力を得て、異文化と取り組む活動を継続していきたい。



2015

3月25日

キッズ英語で遊ぼう（春休み BAN）

7月30日

キッズ英語で遊ぼう



# 05

# 05

## 「外国人はお友だち」から始めて

渭北公民館



### 課題

テーマや概要

2006年9月7日に徳島大学で日本語を学んでいる6名の留学生と本館のふれあい教室・すくらむ学級の受講者の交流会を実施した。外国人との交流ということで当初緊張していたが、留学生の日本語によるユーモアあふれるスピーチに心がほぐれ、その後グループに分かれた会話の活動となった。どうしても知りたいという気持ちから、留学生のプライバシーに触れるような「恋人はいますか？」等の質問も飛び交い、楽しいひとときとなった。最後は全員の阿波踊りにて一連の活動を締めくくった。「外国人はお友だち」交流会と名付け実施したこの活動の背景

には、次のような当公民館の持つ課題があった。

徳島市渭北地区は徳島大学をはじめとして、小、中、高そして文学書道館といった教育機関も多い文教地区である。徳島大学の留学生や研究者の家族も多く住み、またその子弟もこれらの教育機関に通っている。外国人に家主として住居を提供している人もいます。すなわち外国人との接点がある人とそうでない人が混在している。

その中で公民館として「人権教育」を行った際に、この地域に住む外国人の人権という視点で活動を実践することを考えた。そして、徳島大学の留学

生センター（当時）に問合せ、大学教員に異文化理解の講演をお願いした。講演後、話し合う中で外国人と出会ったときにどうすればよいかという知識を得るだけでなく、徳島大学の留学生と地域の公民館利用者が実際に交流活動をする、そして体験を通して互いの理解を図れないかと考えるにいたった。

すくらむ学級やふれあい教室といった年齢の高い公民館の利用者が、外国人との交流を通して、子や孫に外国人とのふれあいの楽しさ等を伝えてもらえれば波及効果も高いと考えた次第である。





## 取組

発見や気づき

その後、毎年だいたい1回6月から9月にかけて交流を試みてきている。これまでの取り組みが文部科学省の委託授業の「とくしま異文化キャラバン隊」による活動として、来てくれる留学生らがオレンジ色のそろいのエプロンを着けるようになったことが変化だろうか。

2006年	6名	留学生による国紹介 グループに分かれて会話 阿波踊り
2007年	5名	留学生によるスピーチ グループに分かれて会話→修了式に参加
2008年	4名	日本の家庭料理体験 食事と交流
2009年	5名	餃子と日本の家庭料理体験 食事と交流
2010年	7名	日本と中国の家庭料理体験 食事と交流
2011年	5名	留学生による国紹介 グループに分かれて会話 阿波踊り
2012年	5名	歌で広げよう! コーラスグループと童謡を合唱
2013年	3名	留学生による国紹介 グループに分かれて会話 阿波踊り
2015年	7名	徳島の野菜を知る 流しそうめん大会 富士山音頭

地域の参加者は毎回20~30名前後である。数にして延べ250名が留学生60名と交流した。

留学生の国には、アジアの慣れ親しんだ国以外に、ベラルーシ等のめったに会えない国の人もいたことが、参加者にとっても刺激となっていたようだ。

回を重ねるにつれて、こちらの対応も手際よくなってきている。交流会のグ

ループ分けや、食事会のときの手配、阿波踊りの有名連のてほき等も活動に組み込んでいる。来てくれる留学生らが喜んでくれるようにと心ばかりの手作りのプレゼントも、好評と聞いている。



## 2006

徳島大学との交流を開始

## 2007 ~

人権教育の勉強会を開催（講師として徳島大学に依頼する）  
その後、年に1回のペースで交流会を実施  
徳島大学の行事等にも参加、ホームビジットの受け入れ等も行う

## 2013

とくしま異文化キャラバン隊として留学生との交流会を実施  
（留学生による国紹介、阿波踊り等）



## 成果

様々な視点から

（広報いほく2015年7月19日号掲載）  
渭北人推協の活動に参加して感想  
山口さん

「鮮やかな青竹をつたって冷たいそうめんが流れる。『オイシイ!』と夢中でそうめんやお寿司を食べる留学生達。彼らの持つ器は、手作りの竹製だ。つゆにはスダチの皮も入っている。とくしま異文化キャラバン隊の7人のみなさんは、徳島大学で学ぶ留学生だ。一人ず

つ持ってきてくれた徳島県産の野菜の調理法について話の花が咲く。ずき（徳島の郷土料理、里芋の茎を煮付けたもの）の試食や富士山音頭も共に踊った。「おいしい」と「おもてなし」は国境を越えた。この交流が彼らの中で育ち、世界平和の礎になることを、心から願ってやまない。」

「留学生と和気藹々とした雰囲気でお話ができる機会はめったにない、とて

もいい体験であり、世界の人の一人としての自分を考えるきっかけになった。」といった声を得ている。

参加者のことばから考えたのは、渭北地区の住民が公民館の活動でこのような感想を持ち、さらに外国人を含めた新たな住民を受け入れる心として、住民に浸透していくことにつながれば一つの成果と言える。



## 未来に向けて

私どものこの渭北には、徳島大学の常三島キャンパスがあり、これからも同じ地域のものとしてのお付き合いがあると思う。留学生のみなさんは数年しかこの地にいないとしても、徳島の思い出の中にこの交流活動が刻まればと思う。大学側の話の中で、地域の人たち

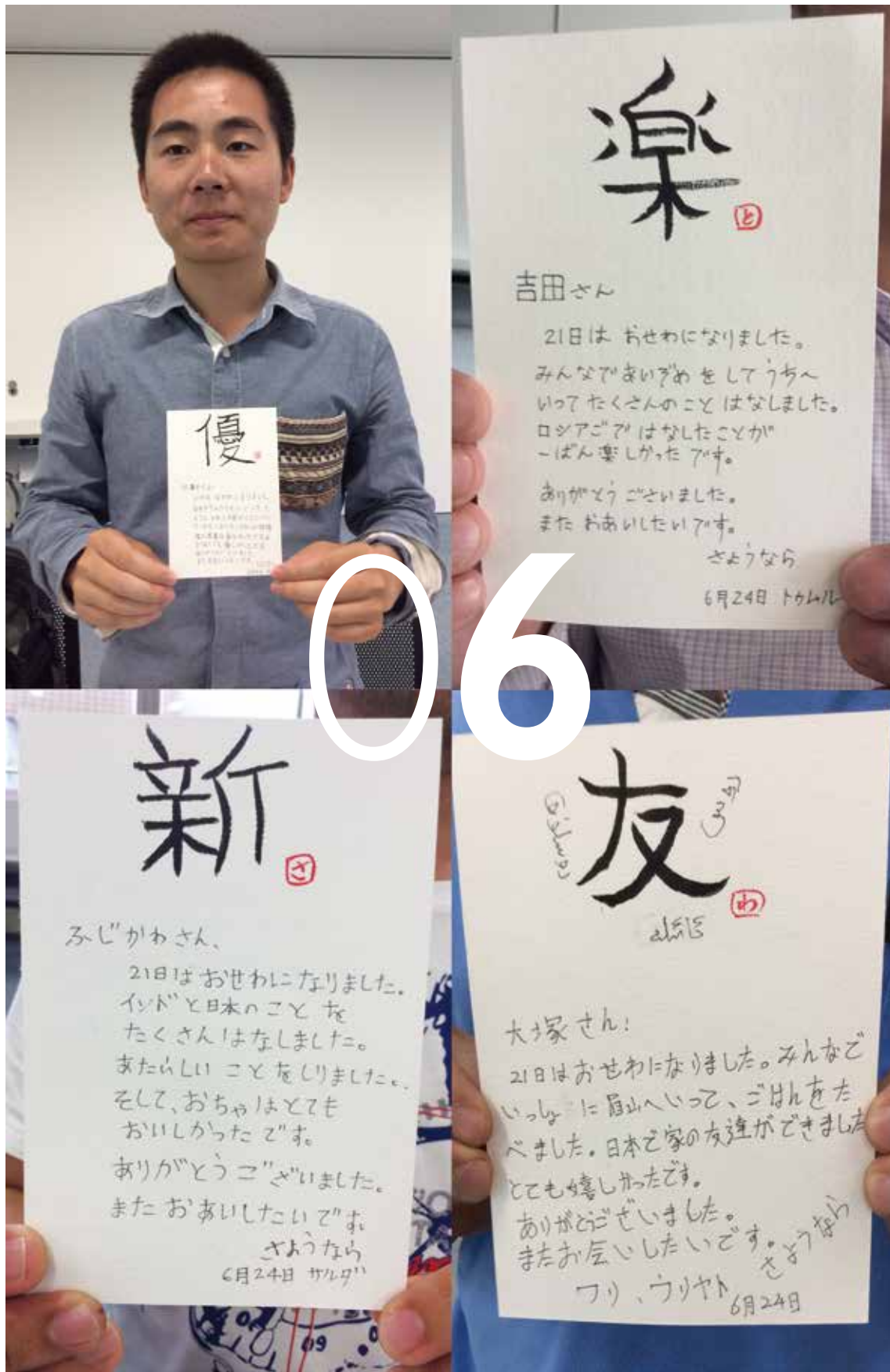
とのつながりをしっかり持った学生が、落ち着いて学習や研究に励めるとのこと。遠いところからはるばる日本そして徳島へやってきて、さびしい気持ちを地域の私どもが少しでも助けることができればという思いから、これからもこの活動を続けていきたいと考える。



## 2015

7月

交流会（徳島の野菜を知る、流しそうめん大会等）



# 06

## ようこそ、藍住へ

藍住町国際交流協会



### 課題

テーマや概要

藍住町国際交流協会は、県内在住外国人を講師に迎え、海外の料理を作り味わい、食文化を通して異文化理解や国際交流に関わる実践活動を行ってきたグループ「世界にトライ」を継承・発展させ、2003年に設立された地域に根差す国際交流団体である。

協会は事務局を藍住町福祉協議会内に置き、町福祉センターを拠点に活動を開始し、ちょうど12年を過ぎたところである。その間、地域日本語教室や多文化共生を目的とするイベントなどを開催し、町内外から多くの受講生や参加者を迎えてきた。しかし、地域の国際交流協会には、どちらかと言

えば小さな枠内での活動が求められる傾向が強く、目の前にある課題に取り組むことが最優先とされるため、大きな視点から世界を見ていくことへの配慮が遅れてしまう場合が少なからずあるのも事実である。

より広い視野に立ち世界を見つめ、多くの最新情報を収集するためには、大学との連携を通して双方向性の交流を活発にし、多文化共生の社会づくりに向けての問題の発見とその解決に向けた積極的な取り組みの推進が肝要である。

そのような中、異文化キャラバン隊のホームビジットは、多文化共生社会

づくりを目指す当協会に良い刺激と活力を与えてくれたと確信している。2014年6月21日、5名の留学生は藍住町内の家庭において日本の生活や文化に触れ、ホストファミリーとの交流や親睦を通して貴重な体験を得たであろうことを願っている。

地域国際交流協会や大学には、今後も起こり得る様々な問題の発見や課題の克服に向けての大きな期待が寄せられている。そのためにも、県下の各国際交流協会と大学との連携の強化と情報の共有、協働を図ることが必須である。





## 取組

発見や気づき

キャラバン隊のホームビジットについては、ホストファミリーとのマッチングが重要であるとの考えから、訪問者のプロフィールとホストの家族構成、現況や要望などを中心に、協会スタッフによる話し合いの場を設けることにしている。

各受け入れ家庭には、ホームビジットの目的や意義について十分に説明し理解を得た後、再度、協会スタッフの協議を経て訪問者の決定の運びとなる。スタッフにも共通理解を得ることで、ホームビジット受け入れについての協会内部での体制が構築され、ホストファミリーとの面識もできることから、次のステップへと繋がっていくことがメリットの一つでもある。

当協会からは、各ホストファミリーに対して、まずは受け入れを楽しむこと、特別ではなくごく自然体で取り組むことの2点をアドバイスしている。ホストファミリーからは、キャラバン隊ホームビジットの受け入れ体験から得られた影響や気づきについて概ね次のような回答が寄せられた。

- 外国の人や異文化に触れる機会を得て、とても新鮮な感覚もあった。
- 互いの国の話をする中で、普段は意識していない自分の「日本」への愛着に気付いた。
- 留学生の国モンゴルについて色々と調べたりなどして、他国にも興味が湧いた。

● 訪問者がイスラム教徒だったので、食事には気を遣った。居酒屋さんでその旨を伝えと、料理の材料を細かに表示してくれ、徳島にも国際化が浸透していると知り感心した。

● 日本に頼れる人が少なく、苦労したことがあると聞いた。特に緊急時の体制が整っているのか心配する。

● 田舎生活でも、外国の人たちに直接触れる機会があることはありがたい。

● 近所の方も、訪問者を見かけて声をかけてくれたので、嬉しい経験となった。



## 成果

様々な視点から

ホストファミリーには、受け入れが初めての家庭と複数回経験のある家庭があったので、キャラバン隊のホームビジットに関しての成果もまちまちではあったが、心と心の触れ合いを実感でき、多文化についての理解が深まったことが最大の成果だと実感する。

● グローバルな視点で世界の動きに興味・関心を持つようになった。

● 自分の地域のことにも関心を向けるようになった。

● 子どもたちにとっても貴重な体験となり、コミュニケーションの大切さを理解できた。

● 家族の中でも、年配者と子どもにとっては、普段と違った体験ができて、本当に良い機会になった。家族全員で交流ができたことが何よりの成果である。



## 未来に向けて

多文化共生まちづくりに向けては、大学をはじめ各地域国際交流協会や団体において創意・工夫を凝らした活動が実践されている。

藍住町国際交流協会では、「命を守る」を大きな目標に掲げ、協会のイベントや機会がある毎に災害時の対応のあり方、防災意識の向上、自然災害について

の学習など実効性の高い取り組みを企画したいと考えている。

共に地域で暮らす仲間として、外国人の安心・安全な生活の確保に向けて、当協会では日本人及び外国人合同の防災訓練や防災講座を開催していく予定である。

2007

11月10日

アフリカの水事情  
藍住町内の小学校へ講師を紹介。学校側の希望に合わせて講師を紹介、授業のサポートも行った。



2009

5月31日

日本の着物文化に触れる  
平安時代から江戸時代にかけて時代の流れと着物の変遷を学ぶ。参加者が着物を身に付け、歴史を実感した。



2011

7月27日

日本語教室  
毎週水曜日午後7時から8時30分まで、教室には町内外からの受講生が通って来る。



2013

6月2日

総会イベント  
「世界を感じてみませんか」  
年度初めの総会イベントでは、毎回、楽しい企画を立て、参加者が親睦を深めている。



2014

6月21日

キャラバン隊とホストファミリー  
キャラバン隊とホストファミリーの対面の際には、スタッフも加わり交流する。



2015

10月25日

秋の研修旅行  
「伊予路を訪ねて」  
例年秋の恒例事業となっている研修旅行は、参加者から人気が高く、バスは満席となる。







# 07

## 徳島から世界へこんにちは

徳島県女性海外派遣交流会 愛称 ペローラ



### 課題

テーマや概要

私たち「徳島県女性海外派遣交流会 愛称 ペローラ」は、徳島県が行う「女性リーダー養成海外派遣」事業として9ヵ国へ派遣されたOGである。2004年度で県の「女性リーダー養成海外派遣」事業が終了したが、その後、賛助会員制度（2009年5月）をつくり自主的な海外研修（フィリピン・ベトナム・ノルウェー・デンマーク・韓国・台湾）を行うことで、新規会員を随時募集している会である。

当会は、「国際親善・交流に関する事業」「女性の地位向上に関する事業」「男女共同参画社会実現に向けて

の事業」「地域社会の活性化に貢献する事業」「ペローラ講座の開催」等を開催し、機関誌「こんにちは」に掲載・発刊することで、広く徳島県民に情報発信し、男女共同参画意識改革が目的である。

当会会員が、2006年「内閣府男女共同参画フォーラムin徳島」の際に分科会座長の徳島大学の教員と交流することで「異文化キャラバン隊」を知った。海外を知ることで自分たちのこれからの課題を模索するために自主海外研修等を行ってきた当会であるが、留学生のホームステイ等で県内での国際

親善に努めてきたものの、徳島県在住の留学生・在住外国人・外国在住体験者等を広く県民に向けての国際交流を考えていたことがきっかけとなった。

今回の地域へ出かけるキャラバン隊は地域住民への多文化共生の必要性と理解を深めるきっかけに大いに貢献していると感じている。また、現在地域で居住している外国人を一過性の住民、お客様ととらえることなく、地域社会の一員として受け入れる意識変革が必要と思われる。



ペローラはポルトガル語で真珠を意味し、「真珠は一粒一粒が丸くて角が無く一個でもその輝きは美しく、輪になるとより一層美しく輝く」ことをイメージして、シンボルマークを考案、風になびく髪は世界の動向を敏感に捉えていることを、伏した目は自己の取るべき行動を熟考する姿を表しています。



## 取組

発見や気づき

当会が、2年に一度開催する「ペローラフェスティバル」(徳島県共催)において、1部では、徳島大学「異文化キャラバン隊」の協力を得て、徳島大学留学生と海外生活の長い日本人、在住外国人女性(計4名)のスピーチによる多文化体験を聞いた。

①「私の日本での生活—簡単な歴史」  
モロジャムツ・エンヘジャガルさん  
(モンゴル)

②「違いから学ぶ—私の経験を  
どうして〜」  
チェ・ユンジュンさん(韓国)

③「米国生活体験記・東京、米国、そして  
徳島」  
フロスト峰子さん(日本)

④「3人の子どもを、幼稚園、小学校、中  
学校に通わせた経験から」  
メアリー・ミラー・マカさん(アメリカ)

ケレコリオ・マカさん<トンガ>と3人の息子さんたちによるミニコンサートで一息入れ、その後、徳島大学Gehertz三隅友子教授による「多文化共生のまちをめざして」と題しての講演を聞くことができた。2部では、異文化キャラバン隊、スピーチをされた4名、参加者との交流会

は、簡単なゲームを取り入れることで会場が和み、親密感が醸し出された。

スピーチされた4名の話から「多文化と何か」を考えてもらうことで興味を持ってもらい、講演会では、「多文化を理解するにはどうすればいいのか」を考えてもらうきっかけになった。交流会では、様々な体験者との直接な交流体験を通じ、多文化を私たちにも理解することができ、「多文化共生まちづくり」が重要だと実感してもらえた。また、私たち日本人の常識が、外国人には難しく理解しがたいことが多いことに気づいた。



## 成果

様々な視点から

徳島大学留学生からは、日本の食文化の健康的なこだわりと着物文化の素晴らしさを、日本在住外国人からは、日本の学校のシステム(健康的な給食・運動会・遠足・安全で親しみ)等、海外生活体験者からは、海外の「いじめをなくすプロジェクト」が紹介され、自分にも人にもやさしい教育環境が整う日がくることを待ち望んでいると、スピーカーの話は、

自分たちでできる何かを考えるきっかけと見過ごしていた徳島県の自然の美しさを教えてもらった。講演内容の外国人をお客さんとしてもてなすことから始め、おもてなしを超えた関係づくりが地域の問題を解決する「かぎ」だと提起された。どこの国のどんな人も同じ人であるということに共感した。



## 未来に向けて

当会は、海外視察研修で「男女共同参画」「教育」「国際親善」「環境対策」等、女性の視点で学んできたが、今後の取り組みとして海外視察研修の報告会を計画し、徳島県民に向けて「人と人のつなが

りの大切さ」を伝えること。また、「異文化キャラバン隊」の力を借りて、在住外国人の災害時の緊急対策や防災対策について「マニュアル」を作るなど行動を起こしたいと考えている。



## 2003

1月

ベトナム視察研修  
急速な経済成長を遂げているベトナムを訪れ、そこに生きる女性たちの生き方・考え方を調査・研究し、国際的な視野に立った女性問題を考えた。

## 2008

4月

フィリピン視察研修  
現地の人々の暮らしを見聞するとともに女性の生き方・考え方を調査研究し、国際的視野から男女共同参画や環境教育について考えた。

## 2010

11月

ノルウェー・デンマーク海外視察研修  
本会の創立25周年を記念し、男女平等政策や高福祉で知られる北欧の施設・団体を視察し、その経験を今後活かしていくとともに国際親善に努めた。

## 2013

3月

東日本大震災被災地への応援「絵手紙」プレゼント訪問  
福島県郡山市「おだがいさまセンター」へ600枚の「絵手紙」「義援金」を届け、災害の記憶や教訓を風化させることなく震災を語り継ぐ活動に努めた。



## 2014

4月

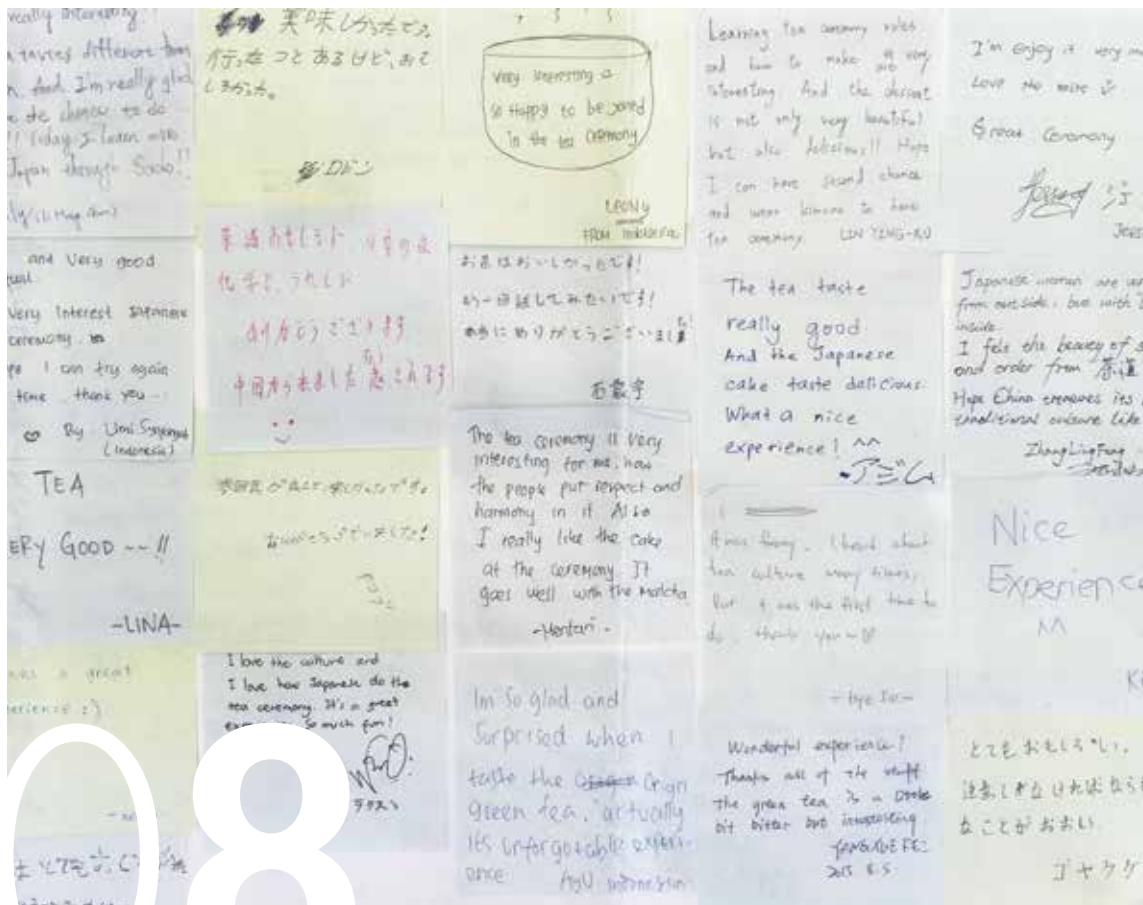
韓国視察研修  
韓国の女性の地位向上が急速に発展することになった「女性家族部」を調査視察し、男女共同参画社会実現への活動に活かしていくとともに、民間レベルでの国際親善に努めた。



## 2014

5月

ペローラフェスティバル  
『「異文化キャラバン隊」といっしょに外国人、留学生、海外在住体験者の話を聞いて交流しよう!』を開催することで、外国人を身近に感じ「多文化共生まちづくり」の実現に努めたいと考えた。



# 08

## ユネスコ活動を通じた 多文化共生のまちづくり

徳島ユネスコ協会



### 課題

テーマや概要

UNESCO(国際連合教育科学文化機関)は、第二次世界大戦が終わった1945年、人類が二度と悲惨な戦争を繰り返さないようにとの願いを込めて1946年に創設された国際連合の専門機関である。教育、科学、文化、コミュニケーションを通じた国際理解や国際協力の推進、人々の交流をととした国際平和と人類の福祉の推進が進められてきた。

徳島ユネスコ協会は、民間ユネスコ

団体として、ユネスコの理念に基づき、国際的相互理解と国際親善に努め、地域の文化や自然を守り、子どもたちを育てる活動を実施している。

2015年現在、会員52名、賛助会員31名、賛助企業・団体2団体となっている。

主な活動は、子ども絵画展「絵で伝えよう!わたしの町の宝もの」、四国八十八箇所霊場と遍路道文化を世界遺産にするための活動、地域の大切な自然や文化を100年後の子どもたちに伝えるため

の「地域未来遺産活動」、留学生への生活用品支援、チャリティバザー、青少年に対する国際理解活動等である。

1976年の設立以来、地道に活動を続けてきたが、グローバル化の時代に国際理解と会の活性化のためにユネスコの基本的な役割の一つである「コミュニケーションを通じた国際理解」を進めるため、キャラバン隊との交流をお願いした。





## 取組

発見や気づき

### ① 講演会「留学生との交流による多文化共生のまちづくり」の開催

平成27年5月17日(日)

14:00～15:30 ふれあい健康館

徳島ユネスコ協会の総会後に、会員と一般参加者を対象に開催した。

徳島大学国際センターの教員から、「とくしま異文化キャラバン隊」と徳島の魅力を再発見し、地域の人々や子どもたちと熱心に交流活動をしていることを聞き、また、人と人とのコミュニケーションのあり方について考えるきっかけを話していただいた。

講演後の交流会では、様々な国からの留学生を交え、参加者との「ふれあい」がごく自然に行われ、ともに楽しい時間を過ごすことができた。

参加者アンケートには、「留学生と過ごしたことで外国人に対する印象が変わった」「心が通じた」「出身国の様々な話が聞けた」「若い人の話が新鮮であった」「今後も交流を希望する」等の意見があった。また、会員相互のコミュニケーションのあり方にも大変参考になったように思う。

### ② 留学生への日本文化（茶道）体験

平成27年8月5日(水)

15:00～17:00

徳島大学しんくら会館和室

徳島ユネスコ協会の国際交流事業として、サマープログラム留学生への茶道体験を行った。

お点前説明の後、和菓子和抹茶を楽しんでいただき、アンケートの結果は大変好評で、作法や雰囲気、お茶の味も予想以上に理解してもらえた。



1976

徳島ユネスコ協会設立  
当時の四国女子大学学長鶴田常吉氏が発起人となり徳島ユネスコ協会が設立される

1992

館野泉チャリティピアノコンサートを開催し、バンクラデシュの子どもたちに楽器を送る

2004

ユネスコ東アジア子ども芸術祭(韓国)に子ども阿波踊りを紹介し好評を得る



## 成果

様々な視点から

ユネスコ活動は、教育、科学、文化、コミュニケーションを通じた国際理解や国際協力を進めるために始まった活動であり、徳島ユネスコ協会においても、「留学生への生活用品支援」や書き損じハガキ・切手回収などの募金活動により貧困などで学校へ行けない子どもに教育を進める「世界寺子屋運動」を支援している。しかし、実際には様々な国の人々に会う機会は少なく、キャラバン隊の活動で身近に留学生と交流できたことは、

参加者にとって貴重な経験であり、多文化共生への理解と相互のコミュニケーションの重要性が改めて認識され、今後の事業計画にも大変有意義であった。



## 未来に向けて

### 今後の事業として

徳島ユネスコ協会は、国際理解や国際協力を進める活動を行ってきたが、今後、キャラバン隊との連携を深めながら、人と人をつなぐ、多文化共生のまちづくりに向けて、次のような事業に取り組んでいきたいと考えている。

- ①外国人遍路体験事業
- ②青少年を対象とした多文化共生イベント
- ③多文化理解をテーマにした講演会



2013

四国ブロックユネスコ活動研究会を徳島市で開催(ユネスコスクールや遍路道文化と世界遺産についての講演やシンポジウム等)

2014

ルワンダの教育を考える会 理事長マリールイズさんの講演会を開催  
「ルワンダの大虐殺を生き抜いたのは教育を受けることができていたから」の体験談を通じ、命の尊さ、教育の大切さを学ぶ

2015

講演会「留学生との交流による多文化共生のまちづくり」の開催



09

# 09

## アートを交えての多文化

徳島県立近代美術館



### 課題

テーマや概要

徳島県立近代美術館とGehrtz三隅先生が協同して、アートを軸とする活動を始めたのは2008年。8年目を迎える積み重ねの中に、このキャラバン隊事業も位置づけることができる。

当館の設立は1990年である。「人間像」をテーマとする特色のあるコレクションを展示し、近現代美術への親しみを広めるための教育事業や、学校との連携にも力を入れてきた。近年は、多様な来館者を想定する「ユニバーサル・ミュージアム」を合い言葉

に、活動の幅を広げつつある。2014年度、来館者の声を具体的に取り入れながら改善を探る方法として、障がい者や高齢者など様々な立場のグループを招いて来館体験をしてもらうワークショップを行った。その際、キャラバン隊は外国人の立場から、当館を含めた文化の森総合公園全体について幅広い視野で検証に取り組んでくれた。これを機に当館と隣接する県立博物館との関係も始まった。このように、これまで国際センターと当館が行ってきた

ことをベースに、キャラバン隊の活動も自然な形で展開していった。

アートと人との豊かな出会いを一人ずつでもいねいに広げていくことが、本物の作品を展示する美術館の根本の望みといってよいだろう。唯一ではない解釈の幅、多面的な魅力を持つアートと人の関係は、様々な面で多文化を考える観点に通じていくという思いが、そもそも三隅教員と竹内が連携活動をはじめた出発点にあった。





## 取組

発見や気づき

エプロン姿のキャラバン隊を初めて迎え入れたのは2013年11月。内容は、お気に入りの作品について話すことと、身体を使った活動的な鑑賞プログラムを、日本人とのペアで行うというもの。従来から展示室で行ってきた授業と同様である。

ただし、キャラバン隊と美術館それぞれにとっての意義や関係性を意識するよう三隅教員から助言があった。そこで、これまで窓口の竹内を中心に対応していた体制を意識して広げてみた。館内の他のメンバーや隣接する博物館のスタッフにも声を掛けたことで、見知った顔ぶれながら、少しだけ改まって「受け

入れチーム」と呼べそうなムードが生じていたことが印象に残る。

2014年7月には、先述の来館体験ワークショップとしてキャラバン隊を受け入れ、鑑賞活動だけでなく施設やサイン等について意見を聞いた。この取り組みの特徴は、客観的な施設点検といった出来高を求めるよりは、実際に観覧も楽しんでもらいながら、心から望むことや困っている立場をくみとっていこうと考える点にある。

この点で少し意外な気づきがあった。留学生の大半は日本語習得に熱意を持ち、総じてミュージアム利用に対しても関心が高い。彼ら彼女らから、困っている

本音や素朴に願っていることを引き出すのは逆に難しいと思いついた。かねてより、個個人の感じ方、話し方を大事に受け止めながらアートを軸に交流する場で感じていたような、母国でのその人、日本語話者である前にどのような人であるかといった事柄が、遠のいていくように感じられた。

これまで主に日本語教育と美術教育の観点から評価して眺めていた、留学生と美術館の関係を、もっと多角的に、相対的にとらえる意識が得られたように思っている。



2008

5月

初めて留学生と日本人サポーターとのペア学習を展示室で行う。

2010

11月

開館20周年記念展「名品ベスト100」会場で、留学生が絵について語るスピーチ。後に冊子「美術館で日本語力をきたえよう」にまとめる。



2013

7月

シュブレンゲル美術館と当館との交流報告会「ドイツ紀行」で、JTMとくしま日本語ネットワークの子どもたちと一緒に鑑賞活動。



## 成果

様々な視点から

建物内サインの不統一や、所管の違いによる園路と施設内部の情報提供が連携しにくいといった、長年放置されてきたアクセスの問題点が、やはり留学生グループとの意見交流によって浮き彫りになった。また、モノとの出会いを楽しむ

ミュージアムの本質という面から考えても、情報を多言語化することばかりが大切なのではなく、どのような人にも楽しみ方や受け入れ姿勢を伝えていこうとするサービスが重要だと再認識した。建物の入口や各館ゾーンへの案内路に、

施設名やWelcomeのメッセージを明示していくサイン改善の方針は、キャラバン隊との交流を元にイメージ化された部分も多い。



## 未来に向けて

多様な立場の人が生き生きと滞在を楽しめるようなユニバーサル・ミュージアムの方向性が、「多文化共生」の多面性を魅力的に映し出すイメージになればと願っている。これまでの留学生との活動を発展させつつ、徳島で働く外国人やその家族の憩いの場となることを新たな目標にして、活動の幅を広げたいと考

えている。2015年度は、開館25周年記念「人間表現を楽しむ25のとびら展」の関連事業として、「びじゅつのとびら[多文化編]」を実施する。母国語で気楽に話すこと、日本語で思いを伝え合えること、そうしたことの起こる場を、アートを軸につくられたらと思う。(上席学芸員 竹内利夫)



「人間表現を楽しむ25のとびら展」





# 10

## みんなで創る ユニバーサルミュージアム事業

徳島県立博物館



### 課題

テーマや概要

県立博物館は、徳島県文化の森総合公園内の複合文化施設の1館として活動をしてきた。徳島の自然と歴史の概要を紹介する総合博物館で、地学、動物、植物、考古、歴史、民俗、美術工芸の7分野から成っている。

開館以来25年となるが、大規模な常設展示室の更新が出来ておらず、展示内容に不具合が生じたり、公共施設としてのユニバーサル化やグローバル

化の流れに遅れを取っている部分が出てきていた。また、近代美術館、二十一世紀館（演劇、音楽等の文化振興・普及や情報システムの運営を行っている）、鳥居龍蔵記念博物館と同一の建物に配置されており、利用者から施設の利用案内などがわかりづらい等の意見をいただいていた。

その中で、平成26年度に近代美術館、二十一世紀館と共同で文化庁の補

助金を受け、地域の様々な立場の人と意見交換を行い、ユニバーサル化への改善をめざす「みんなで創るユニバーサルミュージアム」事業に取り組むことになった。

外国人から見た県立博物館の状況がどうなのか意見をいただくため、異文化キャラバン隊に協力をお願いすることになった。





## 取組

発見や気づき

キャラバン隊の皆さんには、平成26年7月23日と、12月10日の2回、県立博物館の常設展示室に来てもらい、学芸員の案内のもとに常設展を観覧後、博物館の利用について、また展示内容について外国人の立場からの意見をもらった。

展示内容について、限られた時間の中で皆さん熱心に意見を出してください、次のようなアドバイスをいただいた。

- ①英語できれば自国語の解説があるとわかりやすい。
- ②日本語による専門用語が難しい。
- ③日本語による「縄文時代」「弥生時代」などの年代区分がよくわからない。年代は西暦表示してほしい。
- ④昔の道具の使い方がよくわからない。イラストや映像での説明があるとよい。このような意見をふまえて、博物館職員とボランティアで展示理解のため教材を

考え、平成27年2月11日にイベントを開催、公表した。この時も、イベント開催のためのボランティアスタッフとしてキャラバン隊に協力してもらった。

キャラバン隊からもらったアドバイス、解説の年代表記の改善や、文字に頼らない解説については外国人のみならず、多くの人に、よりわかりやすいものになることに気付かされた。

## 2014

7月23日

みんなで創るユニバーサルミュージアム事業、県立博物館常設展での意見交換。

12月10日

みんなで創るユニバーサルミュージアム事業、県立博物館常設展での意見交換。

## 2015

2月11日

みんなで創るユニバーサルミュージアム事業、県立博物館常設展でのイベント「博物館Vキング」でユニバーサル化をめざした教材の公表。



## 成果

様々な視点から

常設展示の解説については多言語対応ができる方向へ改善ということで予算がつき、一部QRコード使って、英語、韓国語、中国語(簡体、繁体)で見てもらえるようになった。また、解説文の年代については、できるだけ西暦を併記するように改善、新しく直すことができた。

様々な立場な人から意見をもらうことで、博物館がより多くの人に親しんでもらえる方向につながった



## 未来に向けて

26年度は主に県立博物館の展示内容の改善についてキャラバン隊から意見をもらった。また、意見をもとに博物館職員とボランティアが試作した教材を使ったイベントに協力していただいた。今後、博物館に興味がある人がいれば、意見をもとに改善の教材試作を共に行う活動につながればと考えている。また、博物館が行う展示の企画などにも様々な立場から多くの人に参加してもらえる事業を行いたいと考える。



「みんなで創るユニバーサルミュージアム 報告書」





## 徳島ならではの!グローバル戦略

～留学生による徳島県産加工食品試食モニター事業～

徳島商工会議所



### 課題

テーマや概要

ASEAN諸国を中心とした査証（ビザ）発給要件の緩和等による訪日環境の改善や、「富士山」、「和食文化」の文化遺産登録、さらには2019年のラグビーW杯、2020年の東京オリンピック・パラリンピック、2021年のワールドマスターズゲームズの国内開催が決定するなど、日本に注目が集まる絶好の機会を迎えており、訪日外国人は2013年に初めて1,000万人を越え、2014年は1,300万人超となった。

このような中、地域における魅力ある資源を掘り起こし、磨き上げ、そして世界に向けて積極的に発信すること

が、経済の活性化や人の流れ・交流の促進に繋がる、地域の未来の展望を開く重要な鍵であり、特に、核となる「観光」や「食」は、人口減少に伴う国内市場の縮小などの厳しい経済環境下では、グローバルな視点を持った取り組みがより大切となっている。

一方、徳島県においては99.9%が中小・小規模事業者であり、インバウンドや輸出などの海外展開に対して、意欲・関心はあっても費用・人材・ノウハウなど多くの課題を抱えている。

そのため、地域経済の中核機関である徳島商工会議所では、徳島ならではの

グローバル戦略を地域振興の柱の一つとして位置づけ、「観光誘客の仕掛けづくり」、「海外展開の動機付け」、「言葉の壁の打破」の3つのアクションに取り組むこととした。

特に「インバウンド誘客」と「県産品の海外展開」には、徳島大学・大学院に学ぶ30カ国200人超（当時）の外国人留学生の存在と、「異文化キャラバン隊」の活発で多様な活動、さらには同大学国際センターの多大なる理解と協力が、大きなバックボーンとなった。





## 取組

発見や気づき

徳島商工会議所が実施主体となり、徳島大学国際センター及び「異文化キャラバン隊」の連携・協力の下、2014年11月より徳島県産品の試食モニター事業をスタート。

増大する訪日外国人への県産品の販売や海外展開の希望や意向がある県内(中小・小規模)企業のマーケットリサーチなどのF/S(事業可能性調査)を目的とした。

具体的には、「竹ちくわ」や「フィッシュカツ」、「柚子みそ」といった徳島を代表する県産加工食品とハラール認証を取得した「洋菓子」を外国人留学生に試食してもらい、味や色、におい、食感といった感覚的な要素から、形、サイズ、包装など外観的な要素、さらには価格等についてアンケートにより評価を得るという手法を用いた。

徳島大学キャンパス内の学生会館を会場とし、留学生の講義時間を考慮して昼休み時間に試食会を開催。月1回の

ペースで計3回(3企業、10品目)実施し、各回20～30名程度の留学生(異文化キャラバン隊)に参加してもらった。

品目毎の原材料表とアンケートは英語、中国語(簡体字・繁体字)で表記し、集計・分析は徳島商工会議所が行い、得られた結果は徳島大学及び参加企業にフィードバックした。

徳島商工会議所においても初めての試みであり、手探りの中での実施であったが、アンケート結果では、出身国による嗜好の違いやハラール認証取得の重要性、商品表示の外国語訳の必要性、所得・物価水準の違いによる設定価格の検討など、参加企業のグローバル戦略の検討に役立つ情報を得ることができた。

また、参加企業の経営者に同席してもらったが、試食会場で意見交換するなど外国人とのコミュニケーションを体験できたことも意義があった。



## 成果

様々な視点から

ムスリムの留学生にとって、ハラール認証を取得した食品は歓迎されたが、「みりん」など禁忌材料が使用されたものは微量であっても拒否されたことから、宗教や文化の違いに対応した製品開発や、総じて「高額」との評価であったこと

から、所得や物価水準のリサーチを踏まえた価格設定が必要であること。

徳島県産品を初めて口にする留学生も少なくはなく、また、参加企業にとっても今回がグローバル化のデビューであったこともあって、県産品の国際的認

知度の低さが顕著であったこと。

等々、今回の試食モニター事業により、「徳島の食」をグローバルに展開する上で、きめ細かな市場調査や積極的な情報発信の必要性・重要性が確認できた。



## 未来に向けて

我が国の食品関連業界は人口減少社会の中において、安全・安心で良質の食材・食品の海外展開などグローバルな戦略が重要となっている。

今後、一層の訪日環境の向上、世界各国との幅広い分野での経済連携、2020

年東京オリンピック・パラリンピックをはじめとする世界規模のイベントの相次ぐ国内開催など大きなビジネスチャンスが到来する。

「異文化キャラバン隊」の皆さんには、様々な活動を通じて実感された、徳島の

自然、文化、食などを母国において大いにPRしていただき、観光やビジネスなどの面で、第二の故郷「徳島」の発展に協力いただけることを期待している。

### 2010.6月～2011.3月

- ・とくしま海外展開研究会を発足(中小企業の海外市場への気運を醸成)
- ・海外のバイヤー向けの冊子「バイヤーズガイド」を作成
- ・香港貿易発展局等との共催によるセミナーを開催

### 2011.4月～2012.3月

- ・とくしま海外展開研究会主催による香港フードエキスポ出展に係る説明会の開催
- ・香港フードエキスポ2011へ出展。「香港貿易発展局主催」(8月11日～15日まで)
- ※香港コンベンション&エキシビジョンセンター開催、約40万人の来場者
- ・貿易実務セミナーの開催

### 2012.4月～2013.3月

- ・香港そごう、香港各地の百貨店「一田百貨」をはじめとしたフェアを3回程度開催。(フェア開催期間①H24.5.28～6.12/②H24.10.24～10.30/③H25.2.20～2.26)
- ・農水省の輸出拡大サポート事業なども活用し、積極的に輸出拡大を支援。
- ・地域商社の育成・支援を図った。(現在は、徳島県が地域商社育成支援事業の一環として当該商社を支援している)

### 2013.5月～2014.2月

- ・前年度に引き続き、香港そごう、香港一田百貨店における販促フェアを開催し、ニーズとシーズをマッチングさせることに注力した。(フェア開催期間①H25.9.20～10.1/②H26.2.11～2.17)



# 12

## 阿波徳島の菓子を体感

市岡製菓株式会社／株式会社ハレルヤ



### 課題

テーマや概要

弊社では、主に徳島県産の農産物を原材料に使用した、菓子の開発／製造を行っている。地産地消を「地元の産物を地元の企業が消費(買い上げ・加工)し全国に販売する」という意味と捉え、全国的に知名度の高い「なると金時」をはじめ、地域のブランドである「阿波やまもも」「木頭ゆず」等の使用に積極的に取り組んでいる。また、徳島で生産された農林水産物(一次産業)をベースに、徳島の企業が食品加工(二次産業)し、さらに流通販売や

サービス産業(三次産業)へとつなげていく「六次産業化」事業展開を目指している。

グループ会社のハレルヤでは、菓子製造のほか店舗運営も行っている。徳島銘菓「金長まんじゅう」の工場直売店では、“お菓子を通じて、友人やスタッフと楽しむことが出来る店舗”をコンセプトに、製造行程の見学ツアーや名物「たぬきケーキ」の手作り体験などのプログラムを展開している。また、土産店として旅行の立寄り先にも

選ばれており、県内外から広く来店していただいている。旅行で来店される方の中には、海外からのお客様も増えてきた。

現在、店舗の配置・表示や商品展開などについて外国のお客様への設備・対応を進めている段階である。我々では気がつかない部分もあるので、留学生の方の真摯な意見を聞いてみたいと思いきゃラン隊に体験・アンケートを依頼した。





## 取組

発見や気づき

徳島商工会議所との連携により、留学生が商品を試食し、アンケート形式で商品評価を行ってもらう試食会を開催した。外国人にも人気と言われている抹茶や小豆を使用した日本風のロールケーキ、徳島県の名産品「なると金時」を加工して作ったスイートポテトなど、計4品の試食を行った。中でも特に評価を求めている商品は、ロールケーキ2品。先述の抹茶のロールケーキとミルクのロールケーキで、こちらの2品は、試食会開催の同月にハラール認証を受けた設備で製造したハラールスイーツでもある。

現状は、実店舗とネット通販のみの取り扱いであるハラールスイーツも、今後海外に向けての販売も視野にしているため、ムスリム学生を含む留学生たちから、様々な感想をいただいた。文化が異なるため、日本に住むム

スリムの方は食品を選ぶ際、相当シビアになるそうだ。既成品はノン・ハラールのもので大半を占めるため、こういったハラールスイーツがあると嬉しいと笑顔を見せてくれた。

翌年8月、「徳島大学国際センターサマースクール2015」の一環として、「金長まんじゅう」の製造行程見学とおまんじゅう、ハラールスイーツの試食会を開催。おまんじゅうが製造ラインで大量に作られる様子をガイド

付きで見学してもらい、焼き立てのおまんじゅうとハラールスイーツの試食会を行った。今回も同様に商品の味や見た目、価格など詳細な内容のアンケートに回答してもらった。味はもとより、売価設定、パッケージ、改良を加えるならどの部分が良いか等複数の項目について自由に意見を出して貰った。国内に住む外国人への商品広報の仕方、輸出や販売などを視野に入れた商品の開発に役立てたい。



## 成果

様々な視点から

キャラバン隊参加者にアンケートを記入してもらうことで、商品を選定する際の着目点は何であるか、各国の食文化に適応しうかなど、リアルな評価を得ることが出来た。

例えば、それが日本で大衆的な商品であっても、同じアジア圏内で同様に

受け入れられるとは限らない。

反対に、受け入れられにくいとされていた商品が好評価を得るなど、我々が日頃認識している「当たり前」の不確

かさ気づかされた。今後、国内外への販路拡大を図るにあたっての、現地でのヒアリング、細かな事前リサーチの重要性を再認識する事が出来た。

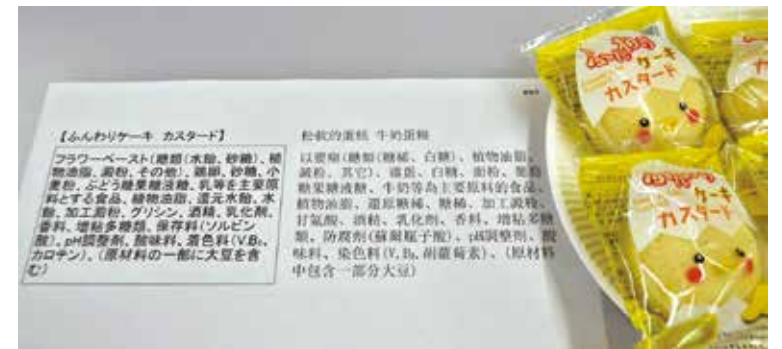


## 未来に向けて

「徳島」にこだわり続ける企業として、今後も徳島の魅力ある産業・加工品・地域資源を国内外に積極的に発信していきたいと考えている。もちろん、徳島県在住の外国人にも喜んでもらえるようなお菓子の開発・販売のほか、商品や店舗への表示の工夫にも手を加えたい。また、現在も取り組んで

いる、農林水産業の六次産業化の一層の推進を図るため、生産農家や行政と共にクラスター事業に参画し、新しい徳島県の特産物を全国にアピールするための商品開発を進める。

徳島の魅力をお菓子を通じて、また店頭での人との交流を通じて体感して貰えるよう、お菓子会社として出来ることを精一杯行い、地域社会に必要なとされる会社であり続けたい。



2011

6月

ハレルヤスイーツキッチン 工場見学・体験ツアー受入開始  
留学生、日本への外国人研修・視察の受入  
(オーストラリア、タイ、フィリピン、カンボジア、台湾、シンガポール等)

2012

四国四県合同商談会in上海に参加

2013

11月

JAPAN FAIR in Vietnamに出展

2014

8月

上海からの旅行団に和菓子作り体験を開催

2015

1月

ハラール認証取得  
徳島マスジにてハラールスイーツ試食会開催  
ベトナムイオン(タンフーセラドン店)「徳島県フェア」に出品・参加



# 13

## 徳島発! かけがえのないものを ゆずりっこ

(株) 柚子っ子



### 課題

テーマや概要

インターネットに代表される情報網の発展と高速交通網の整備により、私たちの生活圏は広がり、情報量も飛躍的に増えた。国際化、グローバル化が進展すればするほど、ローカルなもの、固有のもの的重要性が増大する。このような時代にあって、ローカルな企業は、地域の個性を色濃く反映した商品開発を行い、グローバルな企業の商品との差別化を図り、その販売を通じて地域の文化振興や地域社会の発展に寄与していくことが求められている。

那賀町拝宮地区は、石積みの棚田や段々畑、点在する民家など山村ののどかな風景の中、柚子や干し柿などの農業、手漉き和紙といった伝統的な産業が今も細々と営まれている。また、柚子酢を使ったかきまぜや魚寿司など滋味溢れる郷土食や年中行事など豊かな

生活文化も残る。神社の境内に建てられた農村舞台では、毎年、人形浄瑠璃が鎮守の神に奉納されている。そこには、効率性や経済性だけではない価値観が、今もしっかりと継承されている。

しかしながら、過疎・高齢化が急速に進む典型的な限界集落でもあり、地域文化の継承はおろか、コミュニティの維持すら困難になりつつある地域である。基幹産業であった柚子の収穫作業は、高齢者にとって特にたいへんな作業であり、収穫もされずに放置される柚子が年々増加しているのが現状である。

### (株)柚子っ子

「山の恵みを街に。街の優しさを山にゆずりっこ」をテーマにあげ、ゆずみそをはじめ、ゆずジャム、ゆず茶、ゆ

ず胡椒などのゆず製品を製造、販売している。

平成16年11月から主力商品のゆずみその製造販売を開始

平成19年11月に株式会社化  
平成20年11月徳島県阿波の逸品「特選」に認定

平成21年3月優良ふるさと食品コンクールで「農林水産省総合食料局長賞」を受賞

平成24年10月全国商工会議所女性会連合会女性企業家大賞奨励賞受賞

平成25年11月農林水産省第1回 地場もん国民大賞 審査員賞 受賞

平成25年12月農林水産省フードアクションニッポンアワード 入賞

平成27年1月から2月 経済産業省「地域におけるヘルス産業創出」講師





## 取組

発見や気づき

柚子っ子では、年2回ボランティアを募り、ゆず農家の収穫作業を手伝っているが、現地まで片道2時間を要するため、実際作業できる時間は3時間程度になってしまう。短時間で多くのゆずを収穫するためには、一人でも多くの人手が必要となる。ボランティアを募集している事を知った三隅教員の紹介で徳島大学の留学生が、ゆずの収穫を手伝ってくれることになった。

距離的にも遠く離れ、気候や言葉、文化、食べ物も全く異なる留学生に、地域の風土や歴史、文化を感じてもらうことにより、新しい視点とアイデアで徳島ならではの新たな商品開発、販売戦略を提案してもらうことも期待した。

午前中は道具の使い方、作業上の注意などを説明しながらの初めての経験で作業ははかどらなかった。

昼食をはさみ午後からは、作業や雰囲気にも慣れ、多数のゆずを収穫することができた。留学生の方たちには、ゆずの収穫作業を通じて、日本の山村の現状に触れてもらうことができたと考えている。

後日、毎月最終日曜日に開催される「徳島マルシェ」で、製品となった柚子の販売を体験してもらった。また、徳島商工会議所の企画で、留学生に試食モニター（ハラル認定商品）になってもらい、味、価格、食べ方、販売方法などについて、意見を聞くことができた。発酵食品の柚子みそには馴染みにくいようであったが、ママレードはわかりやすいおいしさが評価された。普段買って食べるには高いが、お土産には適しているとの意見もあった。



2010

11月～

TICO(保健医療・農村開発などの分野でアフリカ・アジアで支援活動を行っている国際協力NPO法人)が所有するゆず畑で収穫を手伝い、そのゆずを柚子っ子が購入し、購入代金をザンビア募金の寄付に役立ててもらっている。

2013

9月

中小企業庁国際室 APEC一村一運動セミナー(バリ島)スピーカー



12月8日

ゆず収穫体験(那賀町拝宮) 徳島大学19名参加

2014

7月27日

とくしまマルシェでの販売体験



## 成果

様々な視点から

徳島で暮らしている外国の方に、柚子の収穫体験等を通じて、徳島の農山村の現状に触れてもらい、過疎・高齢化という深刻な問題と、都市部にはない日本の豊かさが残っていることを認識してもらうことができた。また、彼らの反応から、我々自身が、地方の文化が有する

かけがえない価値を再認識することができた。これまで取り組んできた地域資源を活かした商品開発、販売という事業の重要性に気づかされるとともに、さらに推し進めていくための力をもらえたと感じている。



## 未来に向けて

柚子加工品の開発、製造、販売という事業を通じて、生産地の活性化に寄与することを目指しているが、最終的な商品だけでなく、原材料である柚子の生産地の現状を知ってもらうことの重要性も認識した。

100年以上前に建てられた農村舞台

で行われる阿波人形浄瑠璃の公演や、江戸時代から続く手漉き和紙の製造、長年かけて少しずつつくられてきた景観など、柚子の生産地である地域の総合的な魅力を発信することが、柚子加工品の販売にも、地域の活性化にもつながるのである。

柚子加工品のパッケージに拝宮和紙を活用したり、農村舞台公演のPRに協力したり、今回のような収穫体験などに積極的に取り組むことで事業を軌道に乗せるとともに、外国人の視点を入れながら地域の活性化に取り組んでいきたいと考えている。



11月

柚子っ子霜・ふりゆずママレードにハラルマーク取得(2015年11月 ゆずジャム・柚茶が追加される)



2015

1月28日

徳島商工会議所主催「外国人留学生試食モニター」ゆずみそ・ママレード・柚茶の試食

3月・10月

日本商工会議所女性会「日本ASEAN女性企業家意見交換会」参加





# 14

## 「国際化」に関する自治体職員研修の実施について

徳島県自治研修センター



### 課題

テーマや概要

徳島県自治研修センターは、県職員・市町村職員のための研修施設であり、職員が仕事を進めるに当たって、必要な知識・技能等を習得するための集合研修を企画・実施している。

研修の企画・実施に当たっては、社会情勢の変化、住民ニーズの多様化等に対応するため、様々なテーマを設け研修を行っている。

現在、国際化が急速に進展し、他国の人々と様々なシーンで交流する機会が増加する中、「国際化」への対応も

主要なテーマの一つとなっている。

自治体職員として、また、一住民としても文化や習慣の違いを乗り越えて、友好関係を築いていくための知識やコミュニケーション能力を身に付けることが求められており、当センターにおいても、従来から職員研修を通じて、国際化に対する職員の理解や意識の醸成に努めてきたところであるが、より実践的な形での研修の実施が求められていた。

こうした中、平成17年度から徳島

大学との連携の下、本県への留学生との交流を含めた本格的な研修が大学施設を利用する形で企画され、実践的な異文化交流を取り入れたカリキュラムを実施することとなった。

さらに、平成25年度からの「徳島大学留学生交流拠点整備事業」の実施を契機に、それまでの取組を発展させる形での連携強化を図っているところである。





## 取組

発見や気づき

「国際化」をテーマとした職員研修については、例年11月に実施しており、徳島大学において10月から受け入れている日本語初級者の留学生に当該研修に参加いただき、言葉が十分に通じない状況での職員とのコミュニケーションの実践、日本語上級者の留学生とのセッションなど、プログラムに様々な工夫を凝らしながら実施している。

特に平成25年度、平成26年度においては、「異文化キャラバン隊」の協力により、多くの留学生に参加いただき、様々な国や地域の学生との意見交換、様々な文化とのふれあいを通じて、徳島をはじめ地方では機会を得ることの難しい、一度にまとまった形での異文化交流を体験することができた。

参加した職員からは、「これまでに

経験のなかった交流の場を通じて国際化と多文化共生への理解が深まった」、また、「他国の文化への関心が広がった」などのポジティブな感想が寄せられている。



## 成果

様々な視点から

「異文化キャラバン隊」の参加により、徳島大学の異文化交流の取組が紹介され、大学の方針や事業等への理解が進むとともに、留学生のイキイキと活動する姿にふれることにより、心理的なバリアーが取り除かれるとともに共感にも繋がった。

研修プログラムの中の各セッションやワークショップでは、多くの留学生の参加により少人数単位での交流が実

現でき、より高い研修効果を上げることができた。

また、それまで認識の薄かった国や地域の文化と数多くふれあう機会を設けることができたことにより、それらの文化への理解が深まるとともに、日本で暮らす留学生の思いや悩みを共有することで、職員に多文化共生への意識が醸成された。



## 未来に向けて

今後とも徳島大学との連携の下、教育研究の成果や教育環境などの優れた教育資源を提供いただきながら、本県における国際化の進展状況やそれに伴う課題等も検証し、その結果を踏まえ

た研修事業を実施することで自治体職員に必要な知識・技能等の習得機会を提供するとともに、国際化や多文化共生社会に向けた意識醸成に努めていきたい。



1995

「国際化」をテーマとした職員研修を開始

2005 ~

徳島大学との連携により「国際化講座」を開始(県職員単独研修)  
会場:徳島大学総合科学部1号館【常三島キャンパス】(平成17年度)  
徳島大学留学生センター【新蔵キャンパス】(平成18年度~)

2011 ~

同講座を県職員・市町村職員の合同研修として実施  
会場:徳島大学地域・国際交流プラザ【新蔵キャンパス】(平成23~26年度)  
徳島大学地域創生・国際交流会館【常三島キャンパス】(平成27年度)

2012

「国際戦略講座」に改称

2014

「多文化共生と国際化講座」に改称(関西広域連合構成団体職員も受講対象となる)

2015

1月

「人権啓発推進講座」実施

11月

「多文化共生と国際化講座」実施(テーマ:外国人の人権)





Plan 2 徳島県西部 美馬市

# まほろば 国際プロジェクト

## ●2007年度

2008年1月27日  
「どんぐりと山猫」・国紹介・交流会/  
ホームステイ  
留学生6名と地域住民33名による演劇  
観客数147

## ●2008年度

12月23日  
「島ひきおに」・国紹介・阿波踊り体操・交  
流会/ホームステイ  
留学生9名と地域住民10名と日本人学  
生2名  
観客数110

## ●2009年度

2010年1月17日  
「狼森と筑森、盗森」・サルサダンス・阿波  
踊り体操  
留学生・日本人学生9名と地域住民11名  
による演劇  
観客数163

## オデオン座に 魅せられて



2000年徳島大学に赴任し、その数年後徳島県内を観光して立ち寄った町、うだつの町並みの川向いにオデオン座(昭和8年に建設)はあった。素朴な外観に別段深い感動はなかった。しかし中に入って驚いた。板張りの床、舞台、花道そして木の手すりの着いた二階席、薄暗い中に赤と黄の提灯がぶらさがり、実際には見たことのない世界が現実にあった。使われてはいない奈落も見学して、この異空間にすっかり惚れ込んでしまった。舞台と客席の近さも絶妙で、ここで何かをしたいそう演劇、お芝居をしたいという気持ちになった。この思いを持ちつつ実現には時間がかかった。

日本語を留学生らに教えたコミュニケーション教育を専門とする私は、2004年東京のメディア教育開発センター(2009年3月廃止)にて、竹内敏晴レッスンと野口三千三体操を基本とした演劇的手法を体験する「教育的コミュニケーションの基礎-身体関係からのアプローチ」研修を受ける機会を得た。その研修の最後の課題は受講者全員で宮沢賢治の「鹿踊り(ししおどり)のはじまり」を芝居として作り上げるというものであった。教育的コミュニケーションとは教育の中に身体的コミュニケーションを取り入れて、教師と学生が双方向に学ぶ雰囲気を生み出し、聴きあって、最後に動かしていくという学びである。この学びの体験を各教師が自らの教育実践に活かしていくことが期待されている研修であった。

そうして2006年にまさにこの研修を徳島大学にて実施する機会を得て、研修講師(身体的コミュニケーション及び演劇の指導者)と主催者(当時メディア教育開発センター山地弘起准教授)に東京から来ていただいた。そして2日間にわたって学生や地域の人20名が最終課題として演劇を行う、全員が身体と声を使う熱い研修を行うことができた。この時、演出家でもある講師、瀬戸口充氏がオデオン座を見てきっと何かを感じるだろうという思いにかられ、その感想が聞きたくなったのである。脇町へと向かい、「ここで芝居したくない？」の問いかけの答えは「ぜひ!」であった。こうして、生まれたのが「まほろば国際プロジェクトI II III」である。

参考資料:

「学生評価から教師の内省に向けて-教育コミュニケーションの基礎-  
身体関係からのアプローチを受講して-」メディア教育開発センター  
NIME研究報告第20号 pp.212-237 2006年

## まほろば国際 プロジェクトI II III

こうして、「地域とつながる日本語教育」の活動として2007年から2009年の3年間「まほろば国際プロジェクト」(中島記念国際交流財団助成留学生交流事業)を実施することとなった。このプロジェクトでは大学から地域へ学習の場を広げ、美馬市が所有する文化財「脇町劇場オデオン座」を舞台に、まさに留学生や日本人学生、地域住民らによる演劇活動である。さらにこの活動で、留学生が日本人と協力して演劇をする過程で①日本語のやりとり、ことば以外の身体を使ったコミュニケーションの大切さについて学ぶこと、②演じる者と観る者が一つの空間で作品を共有するという演劇を通じ

た国際交流の場(日本人にとっては多文化共生の疑似体験の場)が実現できると考えた。また「まほろば」の名称は美馬市が掲げる「四国のまほろば美馬市-だれもが住みたくなるまちをめざして-(すなわち外からの日本人・外国人を問わない住民を積極的に受け入れることを勧め、新たな住民とともに地域を活性化していくことを目指す)」から借用して「まほろば国際プロジェクト」と名付けた。

プロジェクトの内容は年によって少し違いはあったが、おおむねはまず7月に留学生が小中学校を訪問し国紹介と交流会さらにホームステイを体験する。10-11月に開催された国民文化祭や美馬市の教育振興大会等に参加し交流の基盤を作る。そして12-1月にオデオン座にて留学生による国紹介、演劇と交流会という一連の活動であった。3年の演劇は前述の演出家によって次の三つが選ばれ上演にいった。

2007年度:「どんぐりと山猫(宮澤賢治)」不思議な世界へ巻き込まれる主人公の一郎を5人の留学生(メキシコ・南アフリカ・ペルー・ドイツ)が場面ごとにリレー形式で演じた。どんぐりたちは地域の演劇クラブの人たちをお願いした。

2008年度:「島ひきおに(山下明生)」では、人間と遊びたいが鬼ゆえに誰からも疎まれ相手にされず、寂しさのあまり島を引っ張り歩き続ける一匹の鬼を9人の留学生(ラトビア・セルビア・ケニア・イエメン・インドネシア・カンボジア・アフガニスタン・メキシコ・ドイツ)が民族衣装に身を包み演じた。鬼の姿をしているがために人間から疎外される立場は「姿形(すがたかたち)が異なる」という目で見られがちな日本社会における外国人のそれと重ね合わせた人も多かった。語りの部分を地域の小学生にお願いした。



2009年度:「狼森と笹森、盗森(宮澤賢治)」では、土地を切り拓いて生き抜く農民と話の語りを留学生9人(中国・韓国・日本)も担当した。これも地域の人や市の職員11人(中国・オランダ・ドイツを含む)らにも一緒に演じてもらった。農業を通した人と自然との対話が世界共通であることを確認できたようである。

このプロジェクトの特徴は、演出家の力を借りて①劇場(空間)を交流の場あるいは出会いの場とすること②日本人と日本語学習者(外国人)が協同して演劇を作ること③演劇活動を在住外国人と観客の日本人がともに楽しむことの三つが挙げられる。

当初は留学生が地元の日本人と協力することから始め、3年目には地域在住の外国人(オランダと中国からの美馬市国際交流員)の参加も得られた。さらに観客として地域で働く外国人(ベトナム人及び中国人研修生)も含めて、地域ぐるみの交流をする機会となった。留学生が日本語を学び、学んだ日本語を使う事によって、地域の人たち

と交流できること、さらに演劇を通して、そのメッセージを共有するという活動が「共生社会」の第一歩となると実感できた。このような対話を通してこれからの「共生」のあり方を考えることにつながっていった。

参考資料:

「地域と作る演劇と日本語教育-まほろば国際プロジェクト3年の活動を経て-」  
第23回日本語教育連絡会議報告発表論文集 pp.159-168 2011年

作成資料:「まほろば国際プロジェクトIII」DVD



## 異文化キャラバン隊によるまほろば国際プロジェクト2013-2015

しばらくの休眠期間のあと、これまでの成果をもとに、文部科学省留学生交流拠点整備事業の委託を受け「とくしま異文化キャラバン隊」による新たな「まほろば国際プロジェクト」の実施にこぎつけた。これまでに培った留学生と地域住民の協働による演劇活動を日本語教育の実践の場として、「多文化共生のまちづくり」の視点からこのプロジェクトを発展させ実施したいと考えた。

2013年度:スタートがやや遅れ、2月に美馬市穴吹小学校にて国紹介、一般の家庭にてホームビジットそして演劇と交流会を実施した。

2014年度:7月に美馬市岩倉及び喜来小学校を訪問し国紹介と交流会、11月には三島小学校の「ふれあい交流収穫祭(児童が地域の人たちと収穫を祝い交流すること目的とする行事)」に参加、児童らの家庭にホームビジットの準備を経て、1月にホームビジットと国紹介、演劇、交流会と1年をととしての活動となった。この年より特に美馬市の協力を得て、オデオン座にて三島小学校6年生の英語劇が演じられたことが交流活動を確かなものにできた。

2015年度:再び11月に三島小学校の「ふれあい交流収穫祭」に参加後、ホームビジットの実施。こうして12月にオデオン座にて、国紹介・三島小児童による和太鼓演奏・「島ひきおに」の上演・参加者全員による交流会を行うことができた。

## 関わる者の気づきと変化

前期のプロジェクトに引き続いて、学びの場を大学から地域へ移すためには、市長をはじめとして様々な組織や団体の協力が大切なポイントであった。また今期からは、演劇指導を四国学院大学(香川県善通寺市にあり、美馬市まで車で1時間の距離)仙石桂子講師(身体表現と舞台芸術マネージメント)と演劇を学ぶ学生たちの支援を得て、徳島大学の学生と演劇を専門とする学生の演劇を通じた出会いと学びの場にもなった。

さらに多くの学校(小学校・中学校・高校)訪問そしてホームビジット・ステイでたくさんの方にもお世話になった。学校訪問では児童・生徒の多文化への気づきと同時

と一緒に企画運営をする教職員ら自身の異文化に対する気づきがあったことを聞いた。ホストファミリーからのアンケートからは、留学生との親密な交流を通して自らのステレオタイプや偏見への気づきについてのコメントを得られている。

宿泊先の施設においても、お風呂の入り方、宗教等による食事制限への対応が当初問題になった。その翌年からは、外国人学生へ情報(使い方等)を伝え、それが実際にできるのかを日本人学生がモデルとなって教えることを徹底した。料理に関しては施設側がイスラムや菜食主義者のための料理を着実に対応してくれるようになったことも実感している。留学生も受け入れ側も少しずつ互いが歩み寄っていることが感じられる。

また三島小学校のふれあい収穫祭にて、近くの介護施設の職員の方々に一緒に働くインドネシア人の介護士に対しての好意的な感想を聞くことができた。技能実習生に加えてこの地域にもまた働く新たな外国人が増えていること、そして協労の必要性も実感した。



#### ●2013年度

とくしま異文化キャラバン隊による「まほろば国際プロジェクト」開始  
2014年2月9日  
美馬市内ホームビジット  
キャラバン隊:7名(エルサルバドル・ホンジュラス・ブラジル・インドネシア・中国各1名・ポーランド2名)  
2月10日  
舞台装飾ワークショップ(草月流)/穴吹小学校・脇町高校訪問  
2月11日  
演劇「島ひきおに」・国紹介・交流会  
キャラバン隊:45名(エルサルバドル・ホンジュラス・ブラジル・インドネシア・アイルランド・ラオス各1名・ポーランド2名・スウェーデン2名・中国5名・日本人学生25名)  
観客数100

#### ●2014年度

7月4日  
ホームビジット  
7月5日  
岩倉小学校・喜来小学校訪問 国紹介と交流会  
キャラバン隊:4名(留学生:中国2名、モンゴル、インド各1名)  
11月16日  
三島小学校「ふれあい交流収穫祭」に参加  
キャラバン隊:7名(留学生:中国3名、クロアチア・イエメン・インド・ケニア各1名)  
2015年1月23日  
重清東小学校訪問 交流/ホームステイ  
1月24日  
舞台装飾ワークショップ(草月流)  
1月25日  
演劇「島ひきおに」・国紹介・小学生の英語劇・交流会  
キャラバン隊:38名(台湾8名、モンゴル、中国各6名、スウェーデン3名、インド、イエメン、ケニア、クロアチア各1名、日本人学生11名)  
観客数150

#### ●2015年度

11月15日  
三島小学校「ふれあい交流収穫祭」に参加/ホームビジット  
キャラバン隊:8名(ブルキナファソ、ブラジル、メキシコ、モンゴル、ラオス、フィリピン、インドネシア2名)  
12月12日  
舞台装飾ワークショップ(草月流)  
12月13日  
演劇「島ひきおに」・国紹介・小学生の和太鼓演奏・交流会  
キャラバン隊:39名(モンゴル、エジプト、インド、ラオス、フィリピン、ブルキナファソ、ブラジル、メキシコ、台湾、インドネシア2名、マレーシア2名、中国5名、日本人学生21名)  
観客数100

## 島ひきおにをめぐって

プロジェクトの締めくくりである演劇に、この3年間は「島ひきおに」を選んだのは理由がある。人権教育の題材としても取り上げられるこの話は、前述のように、鬼は怖い、恐ろしいものとして考えられない人間にとって、いくら鬼が「おーいこっちゃんてあそんでいけ!」と呼びかけても友達にはなれない。人間からひどい仕打ちにあっても、どこかに鬼を受け入れてくれるところがあると信じてずっと歩き続けている。この話の持つテーマは、留学生、日本人学生、また劇を見る人に対して、人種や肌の色、文化や価値観が違うという理由で交流を避けてしまうことへの問題提起であり、人との関係性を考えるきっかけとなしてほしいというものである。まず国紹介によって様々な国を知ることで、その国からの留学生が習い始めの日本語で一生懸命に自分の国を語る姿を見る。これによって、日本に住む自分と広い世界の様々な人たちと文化の存在を知ってもらおう。そして演劇を見てそのメッセージを受け止め、この話の鬼でも人間でもない第三者の立場でそれぞれの気持ちを感じて、考える。さらに参加者全員が一つの輪になるゲームから自由に話して交流するという体験をする。すなわち参加者全員に多文化とは何か、共生に向けてできることを考えるまずは第一歩としてこのプロジェクトを位置づけている。

最終年度の2015年12月の公演では、美馬市の小学生に「島ひきおに」の結末を考えてもらい、5つの結末を披露した。それらは、船乗りと仲良くなって暮らす、鬼の島を見つけてそこで結婚をする、鬼と一緒に暮らしたいという人が現れる、そして最後には一人の女の子が登場する話である。女の子は鬼のことを「怖くない」と言い、「これまで本当にさびしかったんだね」と鬼の気持ちを理解し、「私が友達になってあげる」と手を差し伸べる場面で幕を閉じた。

## オデオン座の魅力をさらに活かして

最後にまほろば国際プロジェクトは、美馬市脇町劇場オデオン座という場(物的リソース)で、学校(小・中・高校・大学)、美馬市(社会的リソース)を使って、留学生・日本人学生・そしてプロジェクトに関わった人(人的リソース)が、演じるという表現方法(プレゼンテーション、演奏、上演といったパフォーマンス)の持つ力で行ったものと言えるだろう。演劇の持つ力とは身体で表現すること、表現されたものをしっかり観ること、そして自分と他者とで何かを作り上げることの三つであり、この力こそが、多文化と付き合っていくための基本的なコミュニケーションの力だと考える。

興味深いのは、同じ国紹介を大学の教室で行うのと、小学校の体育館の舞台で見た和太鼓演奏と、大学内の舞台で演じられた「島ひきおに」とでは、演じる者の動きも気持ちも全く違ったことである。オデオン座のような昭和期の地域の文化を支えていた建物を地域の文化財として、オデオン座の舞台に演じる者、観る者が一緒になって活用していくことを期待したい。うだつの町並みもオデオン座も住み慣れた日本人にとっては古びたとはいえないものに見えるのかもしれない、がしかし、これまで訪れた外国人の目からは、非常に美しいそして温かいぬくもりが感じられる日本の一部であること、その気持ちを持って年代を越えた様々な人々が集える大切な文化遺産として守り続けていきたいと考える。

#### 参考資料

「地域とつくる演劇と日本語教育2014-プロジェクトワークの視点から-」  
第18回ヨーロッパ日本語教師学会 pp.25-30 2015  
「公開インタビュー:異文化キャラバン隊とアジアをひとまわりしよう!」渡部淳他  
『教育プレゼンテーション』2015 旬報社

#### 作成資料

まほろば国際プロジェクト動画2013・2014・2015 3本徳島大学ホームページ内 動画集にて視聴可能  
[http://www.tokushima-u.ac.jp/about/publicity/introduction\\_video/campus\\_9.html](http://www.tokushima-u.ac.jp/about/publicity/introduction_video/campus_9.html)



### Plan 3 徳島県南部 美波町日和佐地区

# 日和佐の魅力発見! プロジェクト

## 活動の概要

本活動はキャラバン隊を美波町に派遣し、留学生、日本人学生、そして地域住民が、美波町のうみがめ、枕状溶岩、海浜植物、千場海岸等の自然、そして長い歴史を有する日和佐八幡神社の伝統文化をフィールドとし、特に留学生の異なった視点から新たな地域活性化、地域経済振興プロジェクトとして発展させるものである。

## 日和佐秋祭参加の経緯



### 進む過疎化と若者人口の減少

2013年から参加している秋祭は、徳島県南部の美波町日和佐地区(同地区は1889年日和佐村として発足、1909年日和佐町となり、1956年赤河内村と合併、2006年由岐町と合併し美波町となる)の八幡神社に伝わるものである。現在、日和佐神社の秋祭には8基の「ちょうさ」(太鼓屋台)が繰り出すが、祭に登場するちょうさの記録は18世紀にさかのぼる。日和佐地区の人口は明治期の漁業の発展とともに増加し、戦後の1950年には9801人とピークを迎える。しかし、2012年では4918人と半減し、中でも祭を支えていた漁村の中心地区の人口減少が著しい。鉄道や国道の陸上輸送網が漁村を離れ、薬王寺の門前町側についたことも影響し、町の人口移動と同時に過疎化が進行し、8基あるちょうさの担ぎ手の不足が地区の元中心地で進み問題となった。

秋祭は神社の氏子組織で運営されており、ちょうさを持つ自治会ごとの子どもが太鼓の叩き役となり、やがては担ぎ手となり、自治会の運営の中心となるサイクルが確立していた。しかし、過疎化は自治会の枠を越えて進行し、従来の氏子組織では祭の維持自体が困難になってきた。

このため2010年9月1日に「日和佐ちょうさ保存会」が町内有志により設立され、自治体や氏子組織を越え「『ちょうさ』8台の奉納運行の保存を目標に活動」している。この活動の一環として祭のフォトコンテストや、カレンダー・ポスター作成、またちょうさの担ぎ手の募集を行っている。

### 地域がキャンパス事業

美波町の中心である日和佐地区は従来の生業であった漁業に加え、高度経済成長期には薬王寺や赤ウミガメを観光資源とし県南部の観光の中心地となってきた。また、県立日和佐高校、同水産高校が設置されていたが、学校統合により2006年と2009年に相次いで統合閉鎖され、急速に進行した過疎化に加え、若者人口が著しく減少している。2010年からの「地域がキャンパス事業(美波町を大学キャンパスに見立てて、県内の大学生に観光促進・文化の維持・防災対策といった幅広い分野を調査研究する)は、この変化を補う役割も期待されており、地元の観光ボランティア団体、環境保護団体、歴史文化保存団体など地域振興団体の協力を得ている。

### 高大連携の取り組み

徳島大学国際センターと徳島市立高校は、南部総合県民局と「地域がキャンパス事業」の新たな展開について相談する中、留学生交流拠点整備事業として、地域の歴史文化を通じて、新しい高大連携教育が展開できないかと考えた。両者は2009年より高大連携教育の推進にあたってきた経緯があるため、留学生だけでなく、日本人学生や高校生を交えて、地域の人々とともに祭礼に参加することで新しい教育効果が生まれ

ると期待し、10月中旬の連休に実施される日和佐八幡神社秋祭(2013年のみは美波町赤松神社奉納吹筒花火にも)に地元の保存会の協力のもと参加することになった。初日の宵宮に男子学生たちは、ちょうさによる町廻りを行い、2014年からは女子学生(留学生・高校生・日本人学生)は地域の観光ボランティアらとともに町を散策し、「日和佐の魅力発見」フォトブックを作成した。そして二日目はともにお祭りに参加した。

### 3年間の参加者—地域を巻き込んで—

	留学生	日本人学生	高校生	キャラバン隊	中学生	ボランティアガイド地域
2013年	12	8	10	30		
2014年	24	7	8	40	6	○
2015年	26	1	10	41	5	○

1年目に問題となったのは、ちょうさを担ぐことのできない女子がどのように1日目の祭りに関わるかであった。2年目からは日和佐中学の生徒と地域住民がグループに分かれ、町を歩き写真を撮って、日和佐の魅力を伝える写真をそれぞれが選び、日本語・英語・中国語のキャプションを協力してつけてフォトブックを作成した。3年目はフォトマップの作成にいたった。



## 日和佐秋祭参加の教育効果・高校生の視点から

交流の意義は、第一には地元の人々から得られるものであった。徳島市内の高校に通う高校生にとって漁村や農村の祭は初めての経験であったし、そこでのふれ合いは同じ高校生から年配の方々まで及んだ。このため「お祭りを楽しむために、もっと地元の歴史を知れば楽しめたのではと思います。見て参加しているだけでもとても楽しい。しかし、祭が始まった背景など知っている、もっと身近なものに感じられると思います。」とのさらに興味を深めようとする感想につながっている。

次に留学生・大学生との交流については、「日本語はもちろん慣れない英語での会話においても、気持ちを伝え合うことで、相互の理解が深まる実感と喜びが得られた。」とのコメントがあったが、さらに「留学生のビルが花火を見て『やっぱり日本っていいね』と言ったのを聞いて日本に生きている良さを再確認することができました。」「クロアチア、インドネシア、台湾からの留学生たちは、このお祭りを本当に素晴らしいものだと言っていた。日本の若者にとっての田舎と、留学生の目から見た田舎の見方はまったく違っていた。」との自文化の再認識につながっていた。中でもこの交流を契機にグローバル化のメリット・デメリットについて考えを深めるレポートも見られた。

「・・・しかし、表裏一体のようにグローバル化によって生じるデメリットもたくさんある。海外から輸入された食品が安く手に入るにより地産地消が失われる可能性があるように、国境を越えて「物」や「文化」や「人」が移動することは、大切にすべき自国や地域のを消滅させる危険性がある。(中略)日本に住む私たちによって、目まぐるしく進むグローバル化からは逃れることはできないが、うまく利用することは可能であり、そのメリットとデメリットを理解した上で、上手につきあっていかなければならない。」





### 新たな高大連携に向けて

高大連携教育というと、出張授業に代表されるように大学側の教育内容を高校に伝えることが中心となってきた。受験情報に特化してきた従来の高校と大学の接続よりも進展しているとはいえ、やはり、高校は大学への輩出機関として役割に終始しており、さらには教員の自己認識もその上で形成される場合が多い。

2015年度には、サマースクール、日和佐秋祭に参加した高校生たちで、内閣府の地域創生政策アイデアコンテストに応募した。日本全体の人口動態をもとにデータを分析し、一つの地域だけが人口を増加させるようなアイデアは空論にすぎないのではないか、との意見が出された。このため、生産人口の減少と高齢者の増加の全体傾向をもとに、それでも可能な地域の活性化案を考え、今回の留学生の視点からみた徳島市と日和佐地区をもとに、さらに徳島市役所や市議会、美波町を訪れ、インタビューを重ね再生案を描いた。



研究成果を論考として発表

このような活動が可能となったのも、今回の企画の成果でもある。また、さらに彼女らが、出会った留学生や地域の人々とネットワークを今後も広げ、ローカルな視点から世界を考える姿勢を堅持することへの期待は大きい。大学における学びと成長を見据えた新たな高大接続を考えることの一助として一つの事例といえよう。

### 広くこの活動を捉え直す

本活動によって、地域を舞台に数えきれない多くの人々への影響があったように思える。多くの人に関わり、丁寧に活動を振り返り継続していくことは、「多文化共生まちづくり」への一歩を踏み出していることにほかならない。祭りに参加しているインドネシア人介護士や外国籍の妻の存在にも出会えた。彼・彼女らは地域に根付いて暮らしている外国人である。地域の構成員として参加しているこの人たちの存在を浮かび上げさせ、地域の人に外国人との共生を違った視点で考えてもらうきっかけともなる活動という捉え方もあるだろう。

一方、留学生(男子)にとって、過酷ともいえる(?)この活動はどうだったのだろうか。活動後のアンケートによる評価は、地域の人と深く関わるといよりこの祭りという文化を体験することが、本当に驚くべきことであったこと、男子の場合は自分も祭りを支える一員として活躍できたことの誇らしさが多く述べられていた。祭りから数か月たってモンゴルとラオスの留学生が自国には海がないため海を見た経験もなく、この祭りでちょうさをつぎながら海へ入るとい体験は、想像もつかないくらい感動的だったことを教えてくれた。日本人の海に対する考えに触れることができたとも聞いた。これも、この祭りを通じて知り得たことである。

作成資料

映像「Rediscover HIWASA」/フォトブック/フォトマップ「日和佐の魅力発見!」

参考資料

地域の国際化を目指す高大連携の可能性 II

-とくしま異文化キャラバン隊の活動を通して- 生駒佳也他

徳島大学国際センター紀要pp.35-49 2013年



## 日本でかंगाえたこと

AYALA PORTILLO RICARDO (エルサルバドル)



みなさん、おはようございます。私はリカルド・アヤラです。エルサルバドルから来ました。専門は英語教育です。どうぞよろしくおねがいます。

私は日本へ来て、5か月日本語を勉強しました。時間はとてもはやくすぎました。今、友達ができ、そしてみなさんがいろいろつたってくださいたり、日本のぶんかをおしえてくださったりしました。それで、みなさんに ありがとうございますを言いたいです。

私はエルサルバドルでは英語のきょうしです。中学校でおしえています。今日は日本とエルサルバドルの学校についてお話しとおもいます。

エルサルバドルの学校はどうでしょうか。

エルサルバドルの学校はにぎやかです。教しつに40から50人のこどもたちがいます。こどもたちは、毎日5時間ぐらい勉強をします。人数が多いですから、長い時間はむりです。じゅぎょうは午前か午後です。学年れきは2月から11月までです。勉強はこどもの一ばん大切なこととおもいます。ほとんどのこどもたちはお父さんがせいかつのために外国へはたらきに行っています。ですからうちでは、お母さんしかいません。こどもたちはいつも学校のあとではたらきます。それは少ししんぱいなことです。そしてこどもたちの話によるとたいへんだそうです。つかれていても毎日勉強します。

では日本の学校はどうでしょうか。

私は、みんなといっしょに高校(徳島市立高校、脇町高校)小学校(穴吹小学校、三島小学校)を見学しました。日本の教育はわかりやすくてすばらしいとおもいました。こどもたちのいちばん大切なことは勉強です。こどもたちのたいどはとてもよかったです。先生のはなしをよくきいて、うるさくなくてすなおでした。日本の先生はやさしいし、ねっしんだしそれにまじめです。そしてりょうしんは子どもをいっしょうけんめいてつだいます。先生とちゃんと学校のせいかつについて話しています。それはいいとおもいます。

ですから、日本は世界でも教育のレベルが高いそうです。

私はこのシステムをもっと知りたいです。国へかえってから、私のどうりょうに、日本でならったことをおしえるつもりです。

じつは日本に来たばかりのとき、いろいろむずかしかったです。それでも、だいじょうぶだとおもいました。なぜならみなさんはしんせつに、やさしく日本語をおしえてくださったので、だんだんせいかつになれてきました。これからも日本語をつかってもっとたくさんの人と知り合いたいととおもいます。

今、私の一ばん好きなことばは「一期一会(いちごいちえ)」です。これで、私のはっぴょうをおわります。聞いてくださって、ありがとうございました。

2013年度後期徳島大学国際センター日本語研修コース修了式でのスピーチ(2014年3月4日)

## 日本語研修コースを振り返って

張 国梁 (中国)



みなさん、おはようございます。張です。今年の四月に中国の武漢からまいりました。今徳島大学で日本語の勉強をしております。これから、日本での生活についてお話しいたします。どうぞよろしくお願いたします。

実は私の弟は五年前に日本に来て、今は滋賀に住んでいます。二年前から私も日本に留学にたくて、去年の八月からじゅんぴをしていました。そして、専門が知能情報の先輩がすすめてくれたので、北先生の研究室で画像処理の勉強をすることになりました。今は、北先生に感謝しています。

今まで、徳島に住んで四ヶ月になります。毎朝学校に行って、毎日たくさん日本語の勉強をしましたが、なかなか、日本語が上手になりませんでした。でも、先生たちはとても優しくて、親切です。そしてこの間に、私たちはたくさん面白い活動に参加したので、日本語のクラスでいつも楽しくすごしました。四月から今までの体験を振り返ってみます。

まず、四月に日本ではじめてお花見をして、桜がきれいなので、びっくりしました。八日に日本語のクラスが始まりました。クラスの新しい友達四人と知り合って、生活がだんだん面白くなってきました。みんなと一緒にひょうたん島クルーズをして気持ちがよかったです。

五月に長町先生が書道を教えてくださいました。中国の漢字と日本の漢字は形が違います。覚えるのが今も難しいです。そしてあまりきれいに書けません。三十日には、美術館へ行って、絵を見て日本語で話しました。私はとくに中学生の井上さんとペアでいっしょにタスクをしたので、とてもたのしかったです。

六月に出村先生と生け花をしました。はじめに絵を描いてから花をいけました。大きな生け花が上手にできて、先生にもほめられました。二十一日のホームビジットはとても楽しみにしていました。この日、藍住町の田井中さんの家へ行って、田井中さんの家族と日本語でたくさん話せたので、本当によかったです。

七月の週末に美馬市の岩倉小学校と喜来小学校で国紹介の発表をしました。そして岩倉小学校では小学生と一緒に屋ごはんを食べました。喜来小学校の小学生がお礼にみんなでうたをうたってくれました。これは、テレビで放送されました。すばらしくて、私は今でもいつも思い出します。そのあと、安楽寺を見学して、旅館に泊まって、そしてもう一度ホームビジットをしました。藤本さんご夫婦と一緒に脇町へ遊びに行きました。月末には中国人の先輩のコウホさんと一緒に、新町川のそばの徳島マルシェでボランティアの体験もしました。

このように、たくさんいい思い出ができました。先生たちや徳島のみなさんがいろいろと手つたって、ほんとうに親切にしてくださいました。私は心から感謝しています。

実は私は四月に日本に来たとき、日本語がぜんぜん話せませんでした。日本語研修コースで日本語を勉強してから、たくさん日本語が話せるようになりました。そして今日はスピーチもできました。これから専門の勉強をしながら、日本語の勉強も続けようと思っています。以上です。どうもありがとうございました。

2014年度前期徳島大学国際センター日本語研修コース修了式でのスピーチ(2014年8月11日)

## けんしゅうコースをふりかえって

DRAGANA JUKIC (クロアチア)



こんにちは みなさん!ドラガナ・ユキッチ です。

クロアチアのグニャからまいりました。クロアチアで 英語の教しをしております。英語の教え方を勉強するために日本へまいりました。どうぞよろしくお願いいたします。

日本へ来る前に いろいろなウェブサイト日本人はきびしくて、勉強だけするとかかれています。それでクロアチアの友達中国やかん国 へ行くことをすすめました。そのとき私はちょっとこまりました。日本のせいかつはたいへんだし、友達もないし、そして 食べものもおいしくないばあいは、どうしたらいいのでしょうか。でも日本へ来てから、そのしんぱいはだんだん なくなりました。

10月、はじめておへんろをしました。クロアチアでは じんじゃとおてらがないので、とくべつなけいけんでした。そのとき日本語が上手じゃありませんでしたから、いろいろなせつめいがわかりませんでした。でも日本人と留学生がいっしょにおいのりをすると、目をとじてしずかで、とても気持ちがよくなりました。おせつたいをうけたとき、こころが大きくなって、ほんとうにうれしかったです。

11月、みましの小学校へ行きました。小学生はかざりをつくらせて、いっしょにたくさんゲームをしました。一番好きなのはもちつきでした。もちをつくるのはたいへんで、びっくりしました。このときから、私はもちをよく食べるようになりました。

1月に日本人のうちでおしょう月をしました。おせちのいみについてせつめいしてもらいました。おとそとおぞうにもしりました。そのあと子どものバスケットボールのたいかいへつれて行ってもらいました。子ども達といっしょに屋敷はんを食べながら、日本語で話してみました。徳島べんはむずかしいから、ボディランゲージをつかいました。そして私は子ども達にやくそくをしました。「来年もういちど来ます。でもそのときは日本語だけで話します」と。とても 楽しみです。

私はクロアチアで英語を教えています。ですから、このけんしゅうコースで日本語を勉強すること、とくにぶんぼうやかいわやはつおんの教え方をならえて、ありがたかったです。先生はやさしくて、いつもたすけてくださいました。そしてたいせつな日本語のきそをおしえてもらえたので、これから鳴門 きょういく大学でも日本語の勉強をつづけようとおもっています。これでスピーチをおわります。ありがとうございました。

2014年度徳島大学国際センター 日本語研修コース修了式でのスピーチ(2015年3月2日)

## 徳島の宝よ! 永遠に

彭悦 (中国)



みなさん、こんにちは。彭悦と申します。徳島に来て一年になりますが、帰国する前に、皆さんに聞いていただきたいことがあります。どうぞよろしくお願いたします。

この一年で、私は徳島から日本のたくさんのところへ旅行に行きました。秋には古い情緒が溢れた京都へ、冬には白い雪で包まれた鳥取へ、春には桜と雪と一緒に舞い落ちた東京へ、夏には藤の花が風と踊っていた福岡へ。旅行から帰るたびに、徳島に着いた瞬間、いつも「ただいま!」と言います。そうです。今では私は徳島を故郷のように感じています。「住めば都」のことば以上に、ここ徳島には宝があるのです。

皆さん、徳島の宝は何だと思えますか。私は三つの宝を見つけました。

まずは自然の豊かさです。徳島に来る前に、武漢というところに住んでいました。武漢は、灰色の高層ビルが立ち並んでいて、大量の車が街を流れ、色とりどりのネオンサインが遅くまで眩しい光を放っています。そのような都市に長く住むと、自然の美にも鈍感になり、心身ともに疲れるのです。でも、徳島は違います。徳島は森林に囲まれ、青空ときれいな川があります。そして、美味しい鳴門金時や春人参もあります。このような自然に恵まれた徳島に來られて、いつも幸せな感じがします。

そして、徳島の二つ目の宝は町の穏やかさです。私が住んでいる新蔵町で朝と晩の8時に美しい鐘の音が聞こえます。一日の初めと終わりが感じられるようで、ここにいる毎日を大切にしたいくなります。そして、徳島の夜はとても静かです。最初は少しさびしさを覚えました。慣れたら、人を落ち着かせる徳島の夜が好きになりました。眉山から徳島を眺める時、いつも見ている大きい建物が小さい光のスポットに見えて、本当に落ち着きます。中央公園のバラ園でもそうです。そよ風に吹かれながら、たまに二匹の猫と一緒に、バラと池に映った月の美しさを楽しみます。このような穏やかな徳島に住んで、いつも落ち着く感じがします。

そして、三つ目の宝は、何よりも大事な人々の温かさです。来る前に徳島の人はとてもやさしいと私の大学の先生から聞いていました。確かにその通りです。お年寄りの方々も、先生や学生たちも、アルバイト先の店長や仲間たちも、みんな親切で、打ち解けて、家族のように感じています。そして、日本人はみんなルールをすごく重んじて、いつもやさしいと思っていました。しかし、信号を守らない通行人や道を譲ってくれない運転手さんも発見しました。でも、こういうところから、私は徳島の人間味と住みよさを感じました。このような人の温かさにも触れて、私は癒されます。

豊富な自然、穏やかな町、そして、温かい人々、この三つの宝がありますよね。この三つの宝が揃っている大都市がないでしょう。ですから、徳島のみなさん、「徳島には何も無い」とはどうぞ言わないでください。徳島ならではの魅力を認め、大切に守り、そして十分に生かせば、徳島が世界の舞台で輝くと思えます。

最後に、もう一つのお願いを聞いてください。この豊富な自然も、穏やかな町も、温かい人の心も、実はそのままほっておいて永遠に輝くダイヤモンドではありません。気を付けないといつかなくなる儚いものです。ですから、徳島の皆さん、ぜひ、この三つの宝をしっかり引き継ぎ、未来の世代へもしっかり渡してください。この三つの宝が大切にされる限り、「VS東京」が「VS徳島」に変わり、徳島は永遠に輝き続けると信じています。ご清聴ありがとうございます。

2015年度外国人による徳島県日本語弁論大会でのスピーチ (2015年7月20日)



## まとめにかえて

### <多文化共生のまちづくり>

二つのエピソードを紹介しながら、今「多文化共生のまちづくり」に必要なことは何かを考えます。

#### エピソード1

##### <お遍路を巡って>

2015年11月28日

寒波が到来した土曜日、キャラバン隊としては4回目の「外国人お遍路体験講座」に21名の留学生と参加した（詳細は本書6ページ「異文化を理解し、国際交流を深めるための“外国人お遍路体験講座”」を参照のこと）。今回は15番札所切幡寺から16番札所藤井寺を目指して、吉野川の潜水橋を横断するコースである。白装束に輪袈裟、菅笠に杖のキャラバン隊のお遍路さんと歩きながら考えた。そもそもこの活動は、2014年に見つかったヘイトスピーチがきっかけとなって始まった。それは外国人女性初の先達(せんだつ)（公認案内人）が道案内のために貼ったシール（ステッカー）に対する言葉の暴力だった。

ヘイトスピーチを行った人物も、この先達の女性にも実は共通点がある。それは、どちらも遍路文化をすばらしい、かけがえのないものと考えていることである。その考えに加えて、前者は民族の優位性を唱え、遍路文化は日本人だけのものと考えている。一方の女性は遍路に出会いそして遍路を通して自らの感謝の気持ちを、次のお遍路さんへ返そうとした行動であった。開祖の弘法大師も中国に留学し、日本でその学びを確かなものにして開いたといわれる遍路道である。遍路はもはや宗教を越えた日本の尊い文化であるということには誰も反対しないだろう。装束に身を包み歩くことは、心身の修行でありお大師さんと共に歩きながら、自分への生きることへの問いかけにほかならない。

さて今回も、ペール（ヘジャブ）を付けたイスラムの女性の参加があった。今話題とされることの多いイスラム教の、彼女からは遍路の文化を学びたい気持ちが感じられた。それは自分の宗教とは違う、寺での一連のお作法、山門に入るとき出るとき挨拶も先達さんに導かれ従っていたことからである。また日本語の授業の合間に短いお祈りを済ませる彼女の顔はいつも晴れやかで穏やかである。私が彼女について思うことは「自分の信じているものを大切にしながら、周りの人とのつながりも大切にしている」という姿



である。このような体験をすると、メディアで毎日耳にする「イスラム」から得るイメージはぬぐいさられる。さらにまた今回の活動が数日後新聞で報道され、彼女の歩く姿が載せられた。新聞記事のコピーを渡すと大喜びで、掲載紙の一部購入、写真にとってfacebookで発信している。書き込みに日本語と英語とインドネシア語の感動の言葉が飛び交っている。そして、自分が留学したことの意義や日本語を学ぶ楽しさも綴ってくれていた。英語教育の研究という目的で来日し、毎日の日本語学習を続けている。彼女にとっての遍路は日本留学の中で大きな意味を持つことになるのだろう。

本書の「はじめに」で、「偏見を持たない人間はいない、大切なことは自分がどのような偏見を持っているのかに気づくこと」と述べました。気づくためには、同じ文化の人とだけではない異なる文化の人とのつきあいが肝要です。様々な人と接触して心の中の摩擦や軋轢を経験することが大切なのだと言えるでしょう。メディアによって自分の中でつくりあげられたイメージが、目の前にいる人と触れ合うことによって変わる可能性が大きいということも体験的にわかる例です。そして、このような「差別」の事件はいたるところで繰り返されています。この負（マイナス）の経験を忘れずに、次には何を準備しよう対応したらよいのかを考え実行に移すことが大切なのでしょう。この事件の発端となったシールは今バッジになり、「1200年の遍路文化を全ての人で守ろう」を訴えています。

⇒異文化を持つ人との接触を自ら増やしていこう！

出会う機会を見つけて行動を起こそう！

⇒おやっと思ったとき、その情報を信じない、疑わないでまず確かめあおう！そして自分の見方をより広く大きく変えていこう！

⇒「差別」から出発して、個人と社会で負を正に向ける変容を実現しよう！

⇒「負の循環」を断ち切る勇気を持とう！

#### エピソード2

##### <新たな日本語教育の活動へ>

##### -東京都板橋区 ことばのひろば->

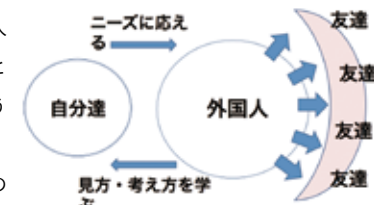
1990年国立国語研究所にて日本語教育の研修を受講していた頃のことである。この時、国立国語研究所は教育方法と



してのプロジェクトワークの開発と地域に暮らし学ぶ外国人の日本語学習に関しての実際的な研究を行っていた。この二つが地域を巻き込んだプロジェクトワークとして私自身の今の研究テーマになっている。また当時の研究所は板橋区と北区の間にあり、急激に増加した外国人への対策として、板橋区は国際交流セミナー（1990年6-7月講演5回、最終的に受講者と国際交流シンポジウムを開催というもの）を実施し、広く地域住民に外国人との共生を考えるきっかけ作りを行っていた。板橋区には国際交流課はなく、文化振興課婦人問題調整担当が部署であった。このセミナーで横浜国際交流ラウンジの相談担当ボランティアの「何かお手伝いできますか」の講演を聞いた受講者4人の女性が、自分たちも地域で何かできるのではと国際交流ボランティアとして活動を起こした。彼女らの姓の頭文字をとって「KOKOの会」と名付け、そこには「ここからできる活動」「個々を大切に」「心と心のつながり」という意味も込められている。

基本的な考え方は、「私たちに何かお手伝いできますか？」から始まった。まずは、在住外国人5人にインタビューによるニーズ調査を行った。11のニーズを抽出し、そこから6つの求められる活動を捻出した。そして「ひと・ことば・そして情報の橋渡し」活動を基本概念とし、自分たちが継続的にできる活動として1)インタビュー 2)パーティ 3)ニュースの発行 4)日本語教室の4つに絞り込んだ。そして、自分たちが外国人のニーズに応える⇔外国人から見方や考え方を学ぶという双方向のやりとりを通して、外国人が地域で他の日本人と友達になることを支援していこうと考えた。

最初、私はこの教室の教師としてボランティアで日本語を教えてほしいとの依頼を受けた。しかし双方向のやり取りを通して学び合うのなら、と新しい日本語教室（プロジェクトワークを中心にした共に学ぶ形の日本語教育）の運営を示し最初の手ほどきをしたのである。日本語教師一人が学習者に対して知識を与える方式ではなく、日本人スタッフが学習者とペアになり、ある課題（タスク）を行うために日本語を使う、その中で通じない事やわからないことはまずはペアで解決していくことが要求される、そのよう



な教室である。1995年には他の3つの活動からこの日本語教室が独立し「ことばのひろば」としてプロジェクトワーク型の日本語教室を現在（2015年12月）も実施している。

板橋区大原社会教育会館にて1日2時間隔週の土曜日の午後（1年に3テーマ4-5回で1ターム）カリキュラムにての実施が25年となり、参加学習者のべ3334人、日本人スタッフ4365人、教室開催数（見学活動も含む）592回と続いている。この25年の間には、日本人メンバーの入れ替わりもあったが常時7-8人が、そして学習者はその時の社会情勢や震災等の影響が現れた参加であったことを聞いている。日本人配偶者を持つフィリピン人や中国人の妻、中国からの帰国者、英語の語学助手（ALT）、近くの日本語学校で学ぶ中国人や韓国人の留学生、そしてIT関連の企業で働く韓国人等といった推移があったようである。学習者の推移とともに、参加人数も急増したり、また震災後に激減したりで臨機応変な対応を続けてきた。しかし今も参加費200円を払って、一つのテーブルを囲んでマナーや生活に関する話題を共に学び教え合いそして最後に歌を歌ったり、お茶を飲んだりして空間と時間を共有するそのような活動を繰り返してきている。

25年間の私とこのグループの関わりを述べたい。当初3年は実際に教室に参加し、教案作り等も指導を行った。その時に作った活動の骨組みがそのまま彼女たちのアレンジによって練られ、地域における日本人参加型のプロジェクトワークのリソースとなっている。その後私の勤務地が大阪⇒徳島へと替わっても年に数回のやりとりをし、相談も受けていた。内容は、ある時期は「学習者が減少し全く来なくなるのではないか」という危機感、「急激に増加した学習者対応ができず、急きょ2クラスで実施」といううれしい悲鳴、「子連れの学習者のための教室内に託児係の配置」、「学習者の要望に応じて年4回（春・夏・秋・冬）と夏学期を増やす運営」、さらに東北地震の際には学習者が0人の日も体験した等その時々々の問題があった。学習者ゼロの事態には「学習者さんが来なければ、それはそれでよい。私たちがこれまでの振り返りをして私たちのために時間を使えばよいのだから。この教室を続けていけば必要とする人がきっと来るだろう」という発想で乗り切ったということも聞いた。

またパートナーを増やすための準備講座をほぼ毎年実施していて、その際この教室の目指すものと日本語教育の新しい方法としての説明を日本語教育の専門家としてお手伝いしてきた。平成14年頃はボランティア志望者も多く会場に60人以上の人が来た時期もあったことを思い出す。

またKOKOの会の4つの活動のうちの「日本語教室」が「ことばのひろば」という名前となって独立した経緯も興味深い。この代表は「自分のイメージしていた日本語教室とは違って、一緒に学べる点、これが本当に役に立つのかという

周りの批判もあるが、私たちはこれが楽しいからやりたいのだ」と言って今に至っている。袂を分かって20年も継続が可能になったのも、この気持ち所以だろう。

きっかけを作ったとはいえ、私自身もこの新しい教育方法を理論として学んだばかりであり、学校という教育機関での実施しか思いつかなかった。しかし「ことばのひろば」が「日本語を体系的に教えるのではなく、目標活動を通してその中で必要な日本語を確認し使っていく、活動の途中での感想やコメントが記録され、主催者側が最終成果物の冊子を作成し学習者とパートナーが評価しあう」ということを地域で実現できていることに正直驚いた。私のプロとしてこうあらねばならないという固定観念を、見事に打ち破ってくれた実践とそれを続けてきた人たちである。この知見を徳島でさらに様々な地域で実現できるように広めるのが私の役割だろう。



さて、ここからもさらに多文化共生のまちづくりに必要なものは何かを考えてみます。一つは、地域の住民が受け入れようと活動を起こしたということです。このメンバーは最初、「お手伝い」から始めていますが、外国人に対して新たな住民として受け入れた立場からスタートしています。そして活動を通して、自分たちがより広い見方をする必要性も学んでいることです。外国人=「怖い」ではなく外国人=「手助けを必要とする人」から「共に学ぶ存在」となっています。また、地域の外国人問題を他人事（よそごと）ではなく自分事としてとらえていることもわかります。

次に、参加する人全員が作り上げる「地域力」、様々な形をとりながら「持続力」、既成概念にとられない「新しいものを作っていく創造力」、そして評価を大切に「診断力」ことを基本概念にし、日本語教育の活動を行ってきたことは、共助社会の在り方の実践とも言えます。

そして、このグループが「教えない日本語教室」を25年前に板橋区で立ち上げそれを継続していることです。地域の行事と一緒に参加したり、地域の施設と一緒に使ったりする事によって自らがモデルを示し日本語と日本の慣習を伝えています。外国人のみならず、参加する日本人に対して「共生を目指す日本人の意識の変容を促している」とも言えるでしょう。徳島という地域が多文化共生の社会になっていくためには、日本語と日本文化を基にして、外国からの人たちを受け入れ

る必要性があります。そのための日本語教育の在り方が重要になります。文化庁は日本語を母語としない住民の日本語学習に対応する施策として平成19年から『「生活者としての外国人」のための日本語教育』事業を行っています。徳島ではJTMとくしま日本語ネットワーク（日本語教師とそれを目指す人のグループ）が平成24年度に委託を受けて事業を展開しました。このような活動をより多く継続的に起こす時が来ていると言えます。

⇒様々な問題を他人事ではなく自分事としてとらえ、できることから一緒に行動しよう！  
⇒日本人と外国人が共に学びあおうという心を持とう！  
⇒共通言語としての日本語、また複数の言語の一つとしての日本語の認識を持とう！  
（自分たちの日本語の見直し、伝える日本語を使うことを考える）

参考資料：JTMとくしま日本語ネットワーク <http://homepage2.nift文化庁ホームページ> <http://www.bunka.go.jp/seisaku/kokugonihongo/kyoiku/seikatsusha/y.com/jtmtoku/index.htm>

参考文献：「共に学ぶ場としての『日本語教室』」1992年1月号「日本語学」明治書院  
「プロジェクトワーク再考-新たな日本語教育の可能性」2012第23回日本語教育連絡会議報告発表論文集

#### <新たな提言をつくる>

日々留学生に日本語を教えながら、約3年間のキャラバン隊の活動を通し、そして地域とのつながりの中でいろいろなことに気づかされました。教室の中でも外でも、私自身が当たり前と思うことが目の前の学生には当たり前とはならないことが頻繁に起こります。それでも一つの活動を一緒にするためには、説明し説得しそして納得してもらわなければなりません。伝えたことが理解され行動につながらなければコミュニケーションは成立しません。一方活動を進めるにあたって、様々な団体や組織の日本人と打ち合わせや相談そして反省を行ってきたわけですが、意図することが違って調整が必要なことも何度かありました。「相手を変える」というのは無理なことを私たちは経験上わかっています。何らかの衝突が起こり、調整がとれないとき、まずは判断を停止し、私たちの共通の目的は何かをもう一度確認することが必要なのでしょう。そして少しずつ「対話」をしながら互いの調整をする、変えられることを互いに変えて、互いに歩み寄りながら共通の目標の実現に向かうしか方法がないことは、言うまでもないことです。すなわち、自分が変わるしかないということです。楽観的にそして簡単に自己変容が社会変容につながるという考えではないのですが、やはり自分という一個人から始まるそして始めることなのでしょう。大切なのは自

分自身が生まれた環境、育った環境、教育や人間関係によって作られた価値観やまた自分が属するジェンダー・人種・年齢・健康・社会的地位・学歴・専門性・宗教・言語等のカテゴリーを巡って自分が自分をどのように思うのか、また他者からどのように見られているのかの確認も必要でしょう。このカテゴリーの中で高低を意識する人もあり、低い位置にいると考える人は偏見と差別を感じています。「主流派や多数派にいる人がこの気づきを持てば差別を回避できる」とミンデル（世界の葛藤解決の指導者）も指摘しています。

さて最後に「知りあおう」「ふれあおう」「認めあおう」の次にくる言葉に関してですが、この書を読まれてどのように思われましたか？ご自身をとりまく今の状況からどの「～あおう」が一番必要なのでしょう。私には身近に外国人がいないという方は「知りあおう」から始めるのもよいでしょう。今の状況の中から4つ目に「わかちあおう」「学びあおう」「話しあおう」等が浮かんできているのではないのでしょうか。そうです、それこそがご自分自身の4つ目の言葉となるのでしょう。

## 「○○○○あおう！」

これを行動に移し「多文化共生のまちづくり」取り組むことを提言にしたいと考えます。

参考文献：A・ミンデル『紛争の心理学』2001年講談社新書

### あとがき

本書の冒頭で述べたように本書は理論書でも単なる活動報告書でもありません。本事業に関わった人が自分の取り組みを見つめ直しさらに未来に向けて語ったPLAN1の14とPLAN2・PLAN3の2つで16の物語です。「はじめに」と「まとめにかえて」には3つのエピソードを入れたので合計19の物語が入っています。多文化共生のまちづくりに必要なものは理論や法律や制度だけではなく、社会のメンバーが一人ひとり自覚を持って、自分の問題として、行動を起こすことです。この書を読んでいただいたみなさんには、どうか20番目の物語として、自分の体験から学んだことを綴っていただきたいと強く願います。机上の空論ではなく一人ひとりの行動から出発し、それがつながり、一步一步未来へ向けて共に進んで行きたいと考えます。そして外国人との共生という多文化共生を考えていますが、外国人以外との共生もまた同じ枠組みで考え取り組むことができるのではないかとも思います。

本事業を進めるにあたって多くの方々と共に歩むことができました。キャラバン隊として活躍してくれている徳島県内の6つの高等教育機関の300人の留学生、大学生そして高校生と、また活動を支えてくださった地域の様々な機関や組織のみなさま、そしてこの報告書の14の関係機関に、深く感謝いたします。本当にありがとうございました。新たなコンソーシアム体制に向けて、これからもどうぞよろしくお願い申し上げます。

徳島大学国際センター Gehrzt三隅友子

執筆関係機関

- 01 NPO法人 徳島共生塾一步会
- 02 徳島市立高等学校
- 03 徳島県立中央テクノスクール
- 04 小松島市教育委員会生涯学習課 中央会館
- 05 渭北公民館
- 06 藍住町国際交流協会
- 07 徳島県女性海外派遣交流会（ペローラ）
- 08 徳島ユネスコ協会
- 09 徳島県立近代美術館
- 10 徳島県立博物館
- 11 徳島商工会議所
- 12 市岡製菓株式会社／株式会社ハレルヤ
- 13 （株）袖りっ子
- 14 徳島県自治研修センター

留学生交流拠点整備事業 運営スタッフ

徳島大学国際センター長 細井和雄

徳島大学国際課長 小林裕美

徳島大学国際課交流企画係 原井由美

留学生交流拠点整備事業 コーディネーター 吉崎礼子

留学生交流拠点整備事業 サブコーディネーター 岡田舞

統括：徳島大学国際センター Gehrzt三隅友子

留学生交流拠点整備事業 とくしま異文化キャラバン隊活動一覧

PLAN 1				
実施日	活動名	関係機関	キャラバン隊数	報道実績
2013.8.12	阿波踊り	徳島市国際交流協会	9名	
11.25	とくしまマルシェ	とくしまマルシェ	4名	
11.30	美術館ペア鑑賞会	徳島県立近代美術館	6名	
12.30	とくしまマルシェ	とくしまマルシェ	4名	
2014.1.17	徳島市立高校訪問	徳島市立高等学校	8名	
1.27	とくしまマルシェ	とくしまマルシェ	3名	
2.24	とくしまマルシェ	とくしまマルシェ	2名	
4.28	とくしまマルシェ	とくしまマルシェ	5名	
5.18	ペローラフェスティバル	徳島県女性海外派遣交流会(ペローラ)	10名	○
5.30	美術館ペア鑑賞会	徳島県立近代美術館	6名	
6.21	ホームビジット体験	藍住町国際交流協会	5名	○
6.30	とくしまマルシェ	とくしまマルシェ、ナカガワ・アド株式会社	11名	
7.23	「ユニバーサルミュージアム事業」 モニター活動	徳島県立近代美術館、徳島県立博物館	8名	
7.28	とくしまマルシェ	とくしまマルシェ	2名	
8.8	夏休み子ども教室「留学生とあそぼう」	小松島市教育委員会生涯学習課 中央会館	5名	
8.12	阿波踊り	徳島市国際交流協会	7名	
10.19	外国人お遍路体験	NPO法人 徳島共生塾一歩会	13名	○
11.5	「多文化共生と国際化」講座	徳島県自治研修センター	20名	
11.26	食品試食会	市岡製菓株式会社/株式会社ハレルヤ 徳島商工会議所	29名	○
11.28	美術館ペア鑑賞会	徳島県立近代美術館	6名	
12.5-12.19	「四国遍路とコンポスター ー世界遺産への道ー」宮本光夫展	(株)宮本光夫デザイン事務所、徳島県、 徳島ユネスコ協会、NPO法人徳島共生一歩会 徳島県国際交流協会		
12.6	外国人お遍路体験	NPO法人 徳島共生塾一歩会	14名	○
12.10	「ユニバーサルミュージアム事業」 モニター活動	徳島県立博物館	14名	
12.12	食品試食会	徳島商工会議所、池添蒲鉾店(株)	26名	○
12.13	「四国遍路とコンポスター 世界遺産への道」ギャラリートーク	(株)宮本光夫デザイン事務所、徳島県、 徳島ユネスコ協会、NPO法人徳島共生一歩会 徳島県国際交流協会		
2015.1.16	徳島市立高校訪問	徳島市立高等学校	15名	
1.28	食品試食会	徳島商工会議所、(株)柚子りっ子	20名	○
2.11	「みんなで創るユニバーサル ミュージアム」発表会	徳島県立博物館	4名	
4.30	トモニsunsunマーケット実地調査	NPO法人 チャレンジサポーターズ	10名	
5.17	トモニsunsunマーケット	NPO法人 チャレンジサポーターズ	6名	
5.17	徳島ユネスコ協会 講演会と交流会	徳島ユネスコ協会	6名	
6.13	美術館ペア鑑賞会	徳島県立近代美術館	8名	
6.21	トモニsunsunマーケット	NPO法人 チャレンジサポーターズ	8名	
7.2	渭北公民館 「留学生と徳島の野菜と食を楽しむ」	渭北公民館	7名	
7.9	「ものづくり体験」交流	徳島県立中央テクノスクール	6名	○
7.14	徳島市立高校訪問 「多文化共生とわたしたち」講座	徳島市立高等学校	20名	
7.20	四国さといビアフェスタin 徳島	アサヒビール(株)	7名	
7.30	夏休みキッズ教室「留学生とあそぼう」	小松島市教育委員会生涯学習課 中央会館	17名	○
8.5	日本文化「茶道と華道」体験	徳島ユネスコ協会	40名	
8.7	市岡製菓工場にて見学と試食評価	市岡製菓株式会社/株式会社ハレルヤ	40名	
8.10	「徳島の魅力発見!」町歩きと報告会	徳島市立高等学校	65名	○
8.12	阿波踊り	徳島市国際交流協会	7名	
10.25	外国人お遍路体験	NPO法人 徳島共生塾一歩会	9名	○
11.4	池田中学校との交流活動	池田中学校(三好市)	26名	○
11.5	「多文化共生と国際化」講座	徳島県自治研修センター	17名	

11.28	外国人お遍路体験	NPO法人 徳島共生塾一歩会	21名	
12.23	「びじゅつのとびら(多文化編)」	徳島県立近代美術館	14名	
2016.1.17	徳島市立高校訪問	徳島市立高等学校	18名	
1.28	企業訪問	市岡製菓株式会社/株式会社ハレルヤ 徳島商工会議所	15名	

PLAN2				
実施日	活動名	関係機関	キャラバン隊数	報道実績
2014.2.9	ホームビジット体験	美馬市	7名	
2.10	穴吹小学校訪問	穴吹小学校	7名	
2.10	舞台装飾ワークショップ	草月流出村丹雅草先生	7名	
2.10	脇町高校訪問	脇町高等学校	7名	
2.10	まほろば国際プロジェクト	美馬市、四国学院大学	45名	○
7.4	岩倉小学校訪問	岩倉小学校	4名	○
7.4	喜来小学校訪問	喜来小学校	4名	○
7.5	美馬市教職員との交流会	美馬市	4名	
11.16	三島小学校「ふれあい収穫祭」	三島小学校	7名	
11.16	ホームビジット体験	美馬市、三島小学校	7名	
2015.1.23	重清東小学校訪問	重清東小学校	6名	
1.23	ホームステイ体験	美馬市	6名	
1.24	舞台装飾ワークショップ	草月流出村丹雅草先生	21名	
1.25	まほろば国際プロジェクト	美馬市、四国学院大学	38名	○
11.15	三島小学校「ふれあい収穫祭」	三島小学校	8名	
12.13	まほろば国際プロジェクト	美馬市、四国学院大学	39名	

PLAN3				
実施日	活動名	関係機関	キャラバン隊数	報道実績
2013.9.3	かいふecoフェスタ	徳島県美波農業支援センター	5名	
10.12-10.13	日和佐八幡神社秋まつり	日和佐まちおこし隊(特定非営利活動法人) 観光ボランティアガイド会日和佐、美波町 観光協会地域おこし協力隊、日和佐ちょうさ 保存会、日和佐八幡神社、薬王寺、日和佐ウミ ガメ博物館カレッタ、徳島県南部総合県民局、 美波町、徳島市立高等学校、阿南工業高等 専門学校、日和佐中学校、株式会社あわえ	32名	○
12.19	ゆず収穫体験	(株)柚子りっ子	17名	
2014.2.17	「地域がキャンパス」推進事業報告会	徳島県南部総合県民局	5名	
10.11-10.12	日和佐八幡神社秋まつり	日和佐まちおこし隊(特定非営利活動法人) 観光ボランティアガイド会日和佐、美波町 観光協会地域おこし協力隊、日和佐ちょうさ 保存会、日和佐八幡神社、薬王寺、日和佐ウミ ガメ博物館カレッタ、徳島県南部総合県民局、 美波町、徳島市立高等学校、阿南工業高等 専門学校、日和佐中学校、株式会社あわえ	38名	○
2015.1.18	阿波民俗芸能フォーラム	徳島県教育委員会教育文化政策課	16名	
2.8	「地域がキャンパス」推進事業報告会	徳島県南部総合県民局	7名	
10.10-10.11	日和佐八幡神社秋まつり	日和佐まちおこし隊(特定非営利活動法人) 観光ボランティアガイド会日和佐、美波町観光 協会地域おこし協力隊、日和佐ちょうさ保存会 日和佐八幡神社、薬王寺、日和佐ウミガメ博物 館カレッタ、美波町、徳島市立高等学校、阿南 工業高等専門学校、日和佐中学校、株式会社 あわえ	41名	○

PLAN4				
実施日	活動名	関係機関	キャラバン隊数	報道実績
2013.9.30	留学生交流拠点整備事業第1回連絡会	とくしま「異文化キャラバン隊地域創生」コンソーシアム		○
2015.5.25	「#LOVE SHIKOKU」情報発信事業説明会	国土交通省四国運輸局企画観光部国際観光課、 四国ツーリズム創造機構	7名	○
10.2	留学生交流拠点整備事業第2回連絡会	とくしま「異文化キャラバン隊地域創生」コンソーシアム		
2016.1.23	留学生交流拠点整備事業 多文化共生フォーラム	とくしま「異文化キャラバン隊地域創生」コンソーシアム		

とくしま「異文化キャラバン」地域創生」コンソーシアム図

